

# 病者の文学

—— 正岡子規における病いと文学 (Ⅳ) ——

「病床六尺」の世界

黒  
沢  
勉

「病床六尺」は「日本」新聞に明治三十五年五月五日から同年の九月十七日まで、百二十七回にわたって連載された随筆である。子規が亡くなったのはこの年の九月十九日だから、死の二日前まで発表された最後の作品と言える。約五ヶ月にわたる連載の中で休載したのは五月九日、十一日、十五日、十六日、十七日、十九日、二十日、二十一日の八日で五月二十二日以降は一日も休むことがなかった。一回の分量は短いものだと三百字足らず、長いものでも千三百字程度、テーマも種々雑多で一つの統一的な問題意識をもつて書いたというより、一種の遊びとして、筆の赴くままに楽しみながら書きついでいったものである。楽しみながら筆にまかせて自由に書く—こんな書き方を子規は好きだった。すでに十七才から二十五才にかけて記された「筆まかせ」もその題の示すように筆にまかせて書かれた随筆であり、子規は天性の「随筆の人」と言えるかもしれない。

しかし、遊びや楽しみとは言っても、この時の子規はカリエスの病床にあり、呻吟し、苦悶し、絶叫しながら生きていく「大病人」である。それでも、その「大病人」が何とかして生きている楽しみ、生きていることの証を自ら求め、人にも示したくて書き続けた。死を目前にしなから、体力や知力の限界まで、命の一滴までふりしぼるようにして子規は書き続けた。その書く姿勢には病苦の影が色濃く反映している。苦しみの記述はもちろんとして、楽しいというその時にさえ。

カリエスの病床を生きる一つの工夫として書き続け、日本新聞に発表し続けるといえるのは明治二十九年「松蘿玉液」に始まるもので、三十四年の「墨汁一滴」、そしてこの「病床六尺」へとつながるものである。二十九年二月、腰痛ひどく、臥褥の身となった子規は以後六年半余りを、カリエスの痛み、苦しみに喘ぎながら生き、書き続けた。

その中で子規の文学―特にその短歌、隨筆が円熟していった。書くことは子規の命の証であった。その命とは「日本」新聞を舞台として活動する文学者としての命であり、喜びや怒りなど味わって生きているという感情生活としての命であり、様々なことに関心をもち、頭を働かせる知的好奇心としての命でもある。

「病床六尺」―三十四才の子規は死と隣りあわせの病床にあつて弱氣にもならずノイローゼにもならず、絶望もしなかった。その精神活動はきわめて活発で、病いゆえの感受性の高揚もみられる。子規はただ生きるのではなく、よく生きること―文学者として生きること何よりも大切にした。重い病いに苦しみながらも、その死の二日前までその文章が発表され続けた、という事実がこれをよく証明している。

その第一回にいう。

「病床六尺、これが我世界である。しかもこの六尺の病床が余には広過ぎるのである。僅に手を延ばして畳に触れる事はあるが、布団の外へ迄足を延ばして体をくつろぐ事も出来ない。甚だしい時は、極端の苦痛に苦しめられて五分も一寸も体の動けない事がある。苦痛、煩悶、号泣、麻痺剤、僅に一条の活路を死路の内求めて少しの安楽を貪る果敢なき、それでも生きて居ればいひたい事はいひたもので、毎日見るものは新聞雑誌に限って居れど、それさへ読めないで苦しんでいる時も多いが、読めば腹の立つ事、癢にさはる事、たまには何となく嬉しくて為に病苦を忘るる様な事が無いでもない。年が年中、しかも六年の間世間も知らずに寝て居た病人の感じは先づこんなものですと前置して」

この一節は「病床六尺」の題の由来を述べ、この連載隨筆の発想・動機を述べたものである。固く緊張感をもつて書き綴られた文章が末尾に至って「先づこんなものですと前置して」と、くだけたうち解けた口語体に転じ、ここまでが前置きであることが示され、以下の文章で、とある水産学校のささやかなエピソードが紹介されていく。

子規はこの時「病床六尺」の限られた世界を己の天地とし、カリエスの激痛を麻痺剤―モルヒネによってなだめるしかない日常を生きていた。救いと言えば「活路は死路の内」にしかない―病苦をのがれるのは死しかないという絶望的な悲惨な状況である。しかしそんな日常の中にあつても、すべてが暗澹とした悲しみの中にあるわけでない。いや、むしろ、子規の心境に即して考えれば、明日をも知れぬわが身のことよりも、この世のことが面白く、人間の世界が面白かったようである。だから「新聞雑誌」をみて腹を立ててみたりまた逆に「嬉しくて為に病苦を忘るる様な事」もある。それをこれから書き綴っていききたいというのである。

子規は明日死ぬとわかつてても死後の世界などよりこの現世を考えた人である。手がかりの得られない、実体のない来世の観念など子規の現実的・即物的な頭には受けつけられなかった。子規にとって天国も地獄も妄想であり、どんなに苦しかろうと生きるというこの現実しかなかった。生きているのが不思議だとさえ言われるような状況の中にあつて、書きつがれた子規の文章は不思議なほど明るく、楽しい。現世の面白さが子規と共にしみじみと感ぜられてもくる。何より驚かされるのはその知的好奇心の旺盛さである。一見すると、子規の心はそのむしろ「病苦を忘る」と無関係に余裕のある世界に遊んでいるようにさえみえる。おそらく子規自身、書いているうちに「病苦を忘る」こともたびたびだったのだろうし、病苦を忘れたくて書いたとも言えよう。思えば、二十四時間苦しみ続ける病人というのも少ないわけで、どんな病人にも心安らぐ一時はあり、楽しい一時もある。その一時を工夫して大切に生きる。「病床六尺」は、子規一流の病いとのおつきあい方、病いを生きる工夫が生み出していった作品である。

「病床六尺」の第二十一回に次のようにいう。

「余は今迄、禅宗の所謂悟りといふ事を誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であつた」

これは子規自らの「悟り」の体験を明らかにしたものである。「悟り」とは仏教語で「迷いが解けて真理を会得すること」(広辞苑)であるが、そこからあらゆる執着を絶つことであり、生にさえ執着しないこと、命も惜しまない、動じない心と解されたりする。禅宗では特にこの「悟り」の体験を重視し、修行の目的も「悟り」を得ることにある。特別に禅の修行をしたわけでもない子規を「悟つた者」と捉えることには異論も出ようが、死に向かう苦しみを生きる子規の態度には「悟つた者」の姿に通うものがあるように思う。迷いや不安、動揺、消極的な諦めを乗り越えた男性的な闘魂―それは禅宗でいう「悟り」に近いものではなかつたらうか。

明治三十三年十二月二十四日、根岸の写真館春光堂が子規庵に来て撮影した、よく知られている写真がある。これは子規最後の写真と推定されるもので背中を伸ばすことができないため斜め横から写したといわれる。病弱なやせ細つた体、丸々と剃つた頭、不精髭を生やした静かな、しかも眼光炯炯たるこの写真は晩年の子規の精神を見事に伝えているように思われる。ここには一休禅師を思わせる、反骨の太々しいまでの落ち着きと氣迫が感じられる。

すでに明治二十七年九月十日付の石井祐治宛書簡の中で「(自らの)病体についても一時は自ら神経を痛め候へども大患後は全く相あきらめ候様に相成候。世界を大觀し心胸を潤くし(〓大きな氣持ちをもつて)不屈不撓(〓屈せず、曲がらず。困難に負けない)の精神を以てどこまでも押着に(〓強い押し精神で)世渡りすること肝要と

存候ぞんじせうろう」と言い「不遇を不遇とせず（＝不運を不運と嘆かず）不幸を不幸とせず是非を一にし（＝不幸にあつても不幸と嘆かず、信念を貫き）吉凶を等しく（＝運不運に左右されず）自らこの俗界に立ちて己おのレノ素志（＝もとからの志）ヲ貫ク者、即ち是れ大悟徹底（＝深く悟った）的の人物、以て与もつともに談ずべきものと存候。小生頃者（＝近ごろ）ますます感ずる処あり」と記しているが「大患」を「あきらめ」るのみならず、「不屈不撓の精神を以て」「素志ヲ貫」こうとする子規の氣迫は逆境ゆえに燃えあがる闘志でもあった。子規の「素志」とは文学に賭ける大志、野望であるが、それは病苦を克服しようという意志力、忍耐力でもある。

「病床六尺」の第二十一回到「余は今迄禅宗の所謂悟りといふ事を誤解して居た。悟りといふ事は如何なる場合にも平気で死ぬる事かと思つて居たのは間違ひで、悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であつた」と子規は記している。これはよく知られているように、甲斐かいの恵林寺えりんじが織田信長の軍に焼かれた時、快川国師かいせんが山門楼上で「安禅は必ずしも山水を煩ひず。心頭を滅却すれば、火自ら涼し」（＝心静かに坐禅するには山水が必要なわけではない。心を整え、集中するなら火のような熱ささえ、おのずと涼しく感じられるだろう。「碧巖録」に見える言葉）と唱えて静かに火中に身を投じた、というエピソードを踏まえたものである。

この偈げは一般に、死すら恐れぬ勇氣、胆力を述べたものとして人口に膾炙している。しかし子規がここでいうように本来「平気で死ぬ」―火中に身を投じること―ではなく、「火自ら涼し」という所に眼目がんもくがあり、「火」の中にあつてさえ平常心を失わないことを言つたものである。

松原泰道は「禅語百選」の中でこれを解説して次のようにいう。

「苦悩から逃避するだけでは解決にはなりません。進んで苦悩に同化するのです。たとえば寒暑は実在するがそれを苦樂のどちらかに決するのは自分の側にあります。氷点下の雪原でスキーに夢中になったり、炎熱の球場で野球

に熱中している時は、寒暑を意識しながら苦悩を感じないのが好い例です。寒暑（苦悩）は客観的にあるし、生きている限り、自分につきまとうのですからどこまでも自己に対決する問題です。スキーや野球に同化している限り、寒暑を意識しながら苦悩をそれほど感じないのは寒暑苦楽と自分とが対決してないからです。相対ではなく徹底して同化してしまうのです。

心頭滅却とは、こうした相対的認識（心）を対するものに同化して昇華することです。すると暑いがままに暑くない、悲しいがままに悲しくないところが開發されます。

泣いているが泣いていない、もう一人の自己、汗を出しながら汗を出していない、もう一人の自己にめぐりあえるのです」

子規のいう「悟りといふ事は如何なる場合にも平気で生きて居る事であった」とは、まさにここにいう「苦悩に同化して昇華すること」であった。病苦に号泣し、呻吟して生きた子規には「汗を出しながら汗を出していない、もう一人の自己」をはっきりつかんでいたのではあるまいか。子規晩年の文学活動は病苦を「昇華」しようとする活動であり、その文章に接してみれば子規の中に「もう一人の自己」がまざまざと見えてくるようだ。

子規は先程の文章に続けて記す。

「因ちなみに問ふ。狗子くし（＝犬）に仏性有りや。曰いわく、苦。

又問ふ。祖師（＝達磨）西来（＝仏道を求めて西のインドにまで赴いた）の意は奈如いかん。曰、苦。

又問ふ。……曰、苦」

これは禅宗の古典ともいわれる「無門関」冒頭の「趙州狗子」の一節を子規流にパロディにしたものである。原文をみると「趙州和尚、ちなみに僧問う。狗子かんしに還つて仏性有りや、また無しや。州曰く、無」とある。ある僧が「涅

槃經」の中に積尊の説法として「一切衆性、悉有仏性」、すなわち一切の生きとし生けるものには仏性がある、と教えているが、それでは犬にもその仏性があるのかと趙州に法論を挑んだ。趙州はこの僧の魂胆を見破って即座に「無」と答えたというものである。即ち、この時趙州が犬にも仏性があると言え、今さら仏性を求めてわざわざ修行する必要などどこにもないということになるうしかといって、又仏性がないと言えは積尊は嘘をついたことになる。趙州の答えた「無」というのは「ない」という意味ではなく、「無」はそのまま仏性のことであり、本来の自己であり、あるとかないかいという分別知を越えた絶対の悟りの境地そのものを即物的に示したものだ、と説かれる。子規はその「無」を自らの病苦の「苦」の一字をもって代えた。

次に「祖師西來の意は奈如」というのも同じく「無門関」第二十七の「庭前柏樹」の一節を踏まえたもので、「趙州、ちなみに僧問う。如何なるか是れ祖師西來意。州曰く、庭前の柏樹子」とある。ある僧が尋ねた。達磨大師がインドへ行って仏法―正伝の禅の精神―を学び、それを伝えようとしたのはどうしてか、と。これも僧がわからなくて聞いたわけではなく趙州が何と答えるのかためしてやれという魂胆からだという。趙州はそれがわかって、分別、知識、理解などを超越した「悟り」そのものの絶対性をもって、「庭前の柏樹子」と答えた。趙州和州のいた観音院には柏の木がたくさんあったという。その庭前の柏をもって答えとしたわけだが、もちろん論理的に考えれば全く答えになっていないわけで、これも分別知を越えた「悟り」の絶対の境地を、目の前の柏の木を借りて示したものだという。（以上、安谷白雲「無門関」春秋社による）

「禅問答」といえばわかりにくいものの代名詞のように使われたりもするが、それは言葉による相対的な認識の世界と体験によってつかんだ絶対の境地とのズレを、言葉という相対的なものでしか示せないところから生まれるものである。こうした禅宗の教義はさておくとして、子規はここでも「庭前の柏樹子」を「苦」と入れ代えた。さ



らに、その問いは具体的に示されていないが、答えに曰く「苦」とある。つまりどんな問いがかけられても「苦」「苦」「苦」と答える。自ら、全身で担っているこの「苦」の中にあつて「平気で」生きていること、「苦」そのものに同化していることを悟りだと示しているわけである。

「無」を「苦」に代えるというのはパロディといえれば確かにパロディである。ユーモアと才気は子規の資質であり、子規は若い頃からパロディを好み、パロディで遊んだ。しかし、この場合のパロディは単なる言葉いじり、言葉遊びではなく「病苦」という苦しみに徹し、苦しみそのものになりきって生きようとする意志力が潜んでいるように感じられる。それは病苦に負けまいとする心、勇気であり、弱音を吐いて絶望しない男性的な気概であり、胆力でもある。

おそらくこの一文を書きながらも子規は本当に痛く、苦しかった。そのさ中にあつて「苦」―「くーッ」と心の中で反復していたのではなからうか。病苦のあまり発するうめき声を漢詩じたてで表現してみたり、肺のラッセル音を駄洒落の種にした子規のことである。「くーッ」と心の中で、あるいは実際に言ってみることも痛みに対する対処法であつた。してみれば「苦」とは単なる文字又、パロディの笑いではなく、子規の肉声である。それは同時に、その肉声を聞く読者にも勇猛心となつて弾ね返る。この「苦」には呪術的な力さえ潜んでいるとさえ言えよう。「病床六尺」を自らの病中の愛読書とした吉野秀雄や、獄中にあつてひもといたぬやまひろしのような人がいたのは少しも不思議ではない。

「病床六尺」の第三十八回から三十九回で子規は半狂乱になり、絶叫しながら人々に助けを求めている。

「ここに病人あり、体痛み且つ弱りて身動き殆ど出来ず。頭脳乱れ易く、目くるめきて書籍新聞など読むに由なし。まして筆を採つてもものを書く事は到底出来得可くもあらず。而して傍らに看護の人無く談話の客無からんか（＝無かつたとしてみよ。その時）。如何にして日を暮すべきか。如何にして日を暮すべきか」（第二十八回）

「病床に寝て、身動きの出来る間は、敢て病氣を辛しとも思はず、平気で寝転んで居ったが、この頃のやうに、身動きが出来なくなつては、精神の煩悶を起して、殆ど毎日氣違いのやうな苦しみをする。この苦しみを受けまいと思ふて、色々に工夫して、或いは動かぬ体を無理に動かしてみる。いよいよ煩悶する。頭がムシヤムシヤとなる。もはやたまらるので、こらへにこらへた袋の緒は切れて、遂に破裂する。もうかうなると駄目である。絶叫。号泣。ますます絶叫する、ますます号泣する。その苦その痛何とも形容することは出来ない。寧ろ真の狂人となつて仕舞へば樂であらうと思ふけれどもそれも出来ぬ。若し死ぬることが出来ればそれは何よりも望むところである、しかし、死ぬることも出来ねば殺して呉れるものもない。一日の苦しみは夜に入つてやうやう減じ僅かに眠気さした時にはその日の苦痛が終ると共にはや翌朝寝起きの苦痛が思ひやられる。寝起程苦しい時はないのである。誰かこの苦を助けてくれるものはあるまいか。誰かこの苦を助けて呉れるものはあるまいか」（第二十九回）

これらの文章を読むと耐えがたい苦しみにもがき泣き叫ぶ子規の様子がまざまざと伝わってくる。おそらく子規の病床に立ち会った人々は、言葉を失つて目をそむけたであろう。子規はその苦痛が幾分やわらいだ時をいかしてこれらの文章を書き、人々にこの苦しみを何とかしてくれ、自分はこうしたらよいのかと訴えているようである。

「日本」新聞の読者は子規の問いかけに無関心ではいられなかった。第四十二回には読者からの助言の手紙が紹介されている。

「拝啓 昨日貴君の病床六尺を読み感ずる所あり左の數言を呈し候。

第一、かかる場合には天帝又は如来とともにあることを信じて安んずべし。

第二、もし右信ずること能はずとならば人力の及ばざるところをさとりてただ現状に安んぜよ、現状の進行に任せよ、痛みをして痛ましめよ、大化（＝人生における大きな変化。この場合、病氣による変化）のなすがままに任せよ、天地万物わが前に出沒いんげん隠現するに任せよ。

第三、もし右二者共に能はずとならば号泣せよ、煩悶せよ、困頓こんとん（＝苦しんで弱り果てる）せよ、而て死に至らむのみ」

子規はこの手紙について「この親切なる、且つ明ちよう（＝筋の通った）平易なる手紙は甚だ余の心を獲たものであつて、余の考えも殆どこの手紙の中に尽きて居る」という。子規は「宗教を信ぜぬ予には宗教も何の役にも立たない。基督教を信ぜぬ者には神の救ひの手は救かない。仏教を信ぜぬ者は南無阿弥陀仏を繰返して日を暮らすことも出来ない」（第四十回）という信仰を持たない者であるから、第一の方法は依る所でなく、第二、第三の方法を自らの病苦の生き方として自覚もしていた。しかし、第三の「号泣せよ」「煩悶せよ」は痛み苦しみの極致にある時の肉体的な反応ともいうべきもので「あきらめて居てもなほあきらめがつかない」（第四十二回）動物的状况といつてよい。従つて最も重視すべきは第二の立場であつて、苦しみのさ中にあつて「現状に安ん」じて「痛みをして痛ましめ、大化のなすがままに」生きつつ、精神的な落ち着き、余裕を失わなかった。そこに子規の病苦の生き方の胸を打つ頸さがある。又知恵がある。その背景にあるのは子規の個性にしみ込んだ古い日本文化の伝統—なか

んずく、禅的な精神だと思われる。

おそらく病苦を支える精神的支柱というものはどのような社会にもある。大病は人生における危機であり、その危機は逆に強烈な人生観や信念というものを要請する。病者が宗教の問題に直面するのはこの故であろう。その場合、欧米のようにキリスト教のゆき渡った社会であれば神、キリストの愛や恵み、それによりすがろうとする信仰が様々な形で影響する。日本の精神風土の中では仏教がやはり影響力をもちうるであろう。その場合、他力が自力かというのが大ききな分かれ目で、子規の病苦の生き方の中には禅的な自力の精神が反映している。禅は武士の宗教であったが、子規自身の血の中にもおのづと禅的なものが流れていたようである。

禅は特定の教義を信じ、仰ぎ、それにすがろうとする宗教ではない。前述したように悟りという内的な体験を重視し、その言述も悟りの体験を得た者の心境を説いたものが多い。

それは「禅語」といわれる短い言葉として結晶している。子規はその禅語に魅かれ時に禅語を病苦を克服する力とした。

たとえば子規の揮毫きごうした書の中に「喫茶去」という三文字を記したものが残されている。文字通りの意味は「茶を喫して去れ」——即ち、「お茶を召しあがれ」という意味の言葉だったが、これも禅語で「趙州喫茶去」の公案からとったものである。ある雲水が趙州和尚に、仏法の大意を聞いたところ、趙州は「喫茶去」と答えたという。後に茶祖といわれた珠光が一休禅師の弟子になり、一休からどんな心得で喫茶するかと問われ、栄西禅師の喫茶養生記なまに倣なまって健康のために飲む、と答えた。その時、一休は「趙州喫茶去」の公案を与え、珠光はそれによって悟ったことから禅の要素の加わった茶道が始まったといわれる。

子規の病床には多くの人が訪れたが子規はそれらの人を心からもてなした。子規庵はあたかも茶室での「一期一

会」の出会いの場となった。「喫茶去」という書には死の近い病床にありながら人との出会いを楽しむ茶道の精神——ひいては禅の心がこめられているのではあるまいか。

客を迎えると言えば、宗教を信ぜぬ子規が病床における生き方として大切にしたものであった。第四十回で子規はいう。

『如何にして日を暮らすべきか』『誰かこの苦を救ふて呉れる者はあるまいか』情ある人我病床に来て予に珍しき話など聞かさんとならば、謹んで予はために多少の苦を救はるることを謝するであらう。予に珍しき話とは必ずしも俳句談にあらず、文学談にあらず、宗教、美術、理化、農芸、百般の話は知識なき予に取って悉く興味を感じぬものはない——子規のこうした誘いに乗じて多くの人が訪れ、様々な「珍しき話」がもたらされた。子規はそれを聞くことをこの上ない楽しみとし、病床の「慰め」を得たが、訪れる人も単なる情報提供者であったわけではなく、病子規の精神に触れ、感銘をあらたにすることも多かった。明日をも知れぬ病者との出会い、話しあいには日常の交流を越える重い意味が感じられたであろう。共に茶を飲み、語りあうごく日常的営みの底に深い死の思いが息づいていた。それは禅や茶の心に通うものでもあったと思われる。

明治三十四年末、赤木格堂が禅の語録「碧巖録」を子規に贈った。子規は三十五年元旦、これが面白かったとい禅のまねをして偈を作って唐紙に大書して見せた。その偈にいう。「馬鹿野郎糞野郎 一棒打尽金剛王 再過五台山下路 野草華開風自涼」(この馬鹿野郎め、糞野郎め、一棒をもってその堅い金剛王を打ちつくしてくれたわい。

しかる後、再び五台山の下の道を通り過ぎた時、野草の花は開き、自ずから涼しい風も吹きわたってきたことだ) 禅の修業は厳しいことで知られており、その語録も体験によってつかんだ心理を自在に示そうとするところから物騒な過激な言葉が多い。ここに出てくる「馬鹿野郎」も「一棒打尽」も「碧巖録」に出てくる言葉に触発された

ものである。子規は禪語を文学的に又、肉体的に受けとめた。その厳しい言葉は子規の気概をふるいた立たせ極限的な肉体の痛みと同化した。この子規の偈には痛みには絶叫しつつも、その叫びを詩化し追放しようとする気迫がこもっている。「馬鹿野郎」、「糞野郎」とは病苦のために起こる癩癩の禪的表現であり、それを一挙に打ちつくし――平定し、しかるのちに安らぎの時が訪れるということを示したものである。子規はこの時、強い言葉、迫力ある攻撃的とも言える言葉でもって自分を責める苦しみに打ち勝とうとしている。ここには自力で苦しみを乗り越えようとする子規の意志力が感ぜられる。「風自ら涼し」とは痛みの後の心の安らぎであったが、痛みには耐える子規流の祈りでもあったろう。

この偈の「馬鹿野郎」は原抱琴に宛てた書簡の中にも見える。抱琴は明治三十五年、肺病で赤十字病院に入院していた。その見舞いに子規から次のような手紙を受けとる。

「雲門曰 薬病相治 盡大地是薬 那箇是自己 コノ馬鹿野郎腰骨ヲ叩キ折って鉛ヲツギコマザレハ病氣ノ味ヲ知ラジ 老秃驢頭ヲ撫デテ来レ 奈良茶飯 三石 蕪漬物一桶 右進呈ス薬ノタメ也 明治三十五年一月 追伸 丸呑ニスル勿レ 老婆心切」(雲門は言う「病いは治る―迷いというも、もともとは存在しないものだ。(なぜなら一度悟ってみれば)天地一切ことごとく病いを癒す薬であり、迷いという病いも、天地も、これ共に即ち、自己自身に他ならない(のだから)」と。(この馬鹿野郎め、腰骨折ってそこに鉛をつぎこまなくては自分のこの病気の味がわかるまい。是非それを教えてやりたいから君のその秃頭、長い馬面をなでながら訪れてくれ。奈良茶飯三石に蕪の漬物一桶を薬として送ろう。漬物は丸呑みにしないように老婆心までに)

雲門曰に始まる十七文字、又最後の「老婆心切」は共に子規がこのころ愛読していた「碧巖録」に見える言葉である。「馬鹿野郎」というのは一見して罵倒のように見えるものの深い愛情をこめた禪的な表現といつてよい。抱

琴はこれによつて子規の苦しみを知り、その中にあつて病氣の自分に奈良茶飯や蕪を送つてくれたことを感謝すると共に、自分よりもはるかに激しい苦しみを体験しながら禪語に遊び、詩の世界に遊ぼうとする子規の氣迫に圧倒されたのである。

苦しみを言語化しようとするのは苦しみの奴隷にならず、主体的に生きようとする人間的精神の現われである。子規のそのような精神は「日々是れ好日」(「碧巖録」)「平常心是れ道」(「無門関」)「随処に主となれば立処皆真なり」(「臨濟録」というよく知られている禪の精神に通うものではなからうか。「日々是れ好日」とは「毎日がめでたい。日常性のマンネリズムを突き破る感動」(岩波文庫注)の表現であり、単に毎日がいい日、楽しい日だといふのではなく晴れた日には晴れを愛し、雨の日には雨を愛し、楽しみあるところは楽しみ、楽しみなき所にも楽しむ、今、この時を精一杯生きることだと説かれている(「禪語百話」)が、子規の病床には「日々是れ好日」の精神が流れている。子規は中江兆民を評して「兆民居士が一年有半を著した所などは死生の問題についてはあきらめがついて居つたやうに見えるが、あきらめがついた上で夫の天命を楽しんでといふやうな楽しむといふ域には至らなかつたかと思ふ」と言い、「病氣の境涯に処しては病氣を楽しむといふことにならなければ生きて居ても何の面白味もない」(第七十五回)と述べているが「病氣を楽しむ」はまさに、「日々是れ好日」の子規的な表現といつてよい。又「平常心是れ道」の道とは禪の心に限らず、華道、剣道などの道にも通じるものといわれるが、子規文学も「平常心」が日常性がそのまま文学の心である。さらに又、「随処に主となれば立処皆真なり」は自分の置かれた場所で精一杯尽くすなら真実のいのちにめぐりあえる。随処に(どこにでも)自分を没入して惜しまぬ愛情だと禪では説かれる(同)が、己れを忘れて「今」、「ここに」専念する子供のような無邪氣さ、ひたむきさはそのまま子規の心であつた。

## 四

「病床六尺」の中には、「仰臥漫録」を受けついで病苦の日記的叙述が時折顔をのぞかせている。「墨汁一滴」が連載されたのは明治三十四年一月十五日から七月二日まで、同年九月二日から、公表しない日記「仰臥漫録」が自分の生活に焦点を絞った形で記録され、明治三十五年五月五日から、この「病床六尺」が書かれるのだが、「仰臥漫録」はここにも影を落としている。その場合、子規ははっきりその日付まで記している。たとえば第五回。

「明治三十五年五月八日、雨記事。昨夜少しく睡眠を得て昨朝来の煩悶や稍度を減ず。牛乳二杯を飲む。九時麻痺剤を服す。(中略)主客五人打ちよりて家計上のうちあけ話しあり。泣く、怒る、なだめる。この時窓外雨やみて風になりたるとおぼし。十一時半又麻痺剤を服す。碧梧桐夫妻帰る。時に十二時を過る事十五分。予この頃精神激昂苦悶や已まず。睡覺めたる時、殊に甚し。寝起を恐るるより従つて睡眠を恐れ、従つて夜間の長きを恐る。碧梧桐等の帰る事遅きは予のために夜を短くしてくれるなり」——五月八日の出来事をそのまま記したものだ、新聞公表ということもあり、碧梧桐が夜遅くなって帰ったのは、子規の苦しい夜を短くしてくれるためだというふうには読者に紹介する意識も働いている。

また、第八十回。「七月二十九日、火曜日、曇。昨夜半碧梧桐去りて後眠られず。百合十句忽ち成る。一時過ぎて眠る。朝六時睡覺む。蚊帳はづさせ雨戸あけさせて新聞を見る。玉利博士の西洋梨の話待ち兼ねて読む。印度仙人談完結す。二時間程睡る。九時頃便通後稍苦しく例によりて麻痺剤を服す。薬いまだ利かざるに既に心愉快になる。この時老母に新聞読みてもらふて聞く。振仮名をたよりにつまづきながら他愛も無き講演の筆記など読まるるを我は心を静めて聞きみ聞かずみ、うとうととなる時は一日中の最も楽しき時なり(後略)」



また第八十八回、「八月六日。晴。朝、例によりて苦悶す。七時半麻痺剤を服し新聞を読んでもらふて聞く。牛乳一合、午餐<sup>ごさん</sup>。頭苦しく新聞も読めず画もかけず。されど鳳梨を求め置きしが気にかかりてならぬ故、休み休み写生す。これにて果物帖完成す。始めて鳴門蜜柑を食ふ。液多くして夏<sup>だいたい</sup>橙よりも甘し、今日の番に左千夫来る。午後四時半又服剤。夕刻は昨日より稍心地よし。夕刻寒暖計八十三度」

日付の入った日記的叙述が見られるのは以上の三回で、いずれも麻痺剤によって痛み苦しみをなだめながらも、飲んだり、食べたり、俳句を作ったり、菓物の写生を楽しんだり、新聞を読んでもらったり、といった子規の終末期の生活が記録的なスタイルで読者に報告されている。

「仰臥漫録」という日記を「ホトトギス」に載せようとした虚子の提案を、立腹して退けた子規であるが、ここでは自らの日常をそのまま読者の前にさらしている。矛盾といえば矛盾だが、「病床六尺」はやはり全国の読者の目を意識している。読者からすれば悲惨な病苦を生きる人間の日常些事につきあわされるのはごめんだとうち棄てる人もいたであろうが、病者とはどのようなものか、人間はいかにして死んでいくのか、いわばこわいものみたさの好奇心を働かせる人もいたであろう。何よりも「正岡子規」という存在そのものが、一方で「日本」新聞を舞台とする俳句革新、短歌の革新運動、そのすぐれた随筆によって、又急速に売り上げを伸ばしつつあった「ホトトギス」の実質上の師として、著名な存在となっていた。子規を師と仰ぐ人は、日本全国に広がっていたのである。当然その私生活について関心をもっていた人も多かつたろうし、その病状を案じる人もいたであろう。子規はそれに応え、病苦の中にあってもなお書いている「風雅」の心を人々に示し、わが庵に来たれ、と呼びかけようとした――日記的叙述の中には、子規のそのような願いが潜んでいるのではなからうか。

「病床六尺」―その言葉通り、己が病床の六尺から一步も立ち上がることのできない、閉ざされた狭い空間を子規は生きなければならなかった。しかし、自閉的、鬱的な状況の中にあつて子規の心はふしぎなほどのびやかに外界にむかつて開かれ、そのアンテナは敏感に外界の情報をキャッチし、それに主体的な反応を見せている。

死にかけている身でありながら、子規にとってこの世はずいぶんと面白い所であつた。第十四回には自分が見たと思つているものを次々に列挙し―一、活動写真 一、自転車の競争及び曲乗 一、動物園の獅子及び駝鳥 一、浅草水族館 などと十一ばかりを箇条書きにした後、結びに「数ふるに暇がない」と記している。いずれもささやかなもので、足腰の立つ人間ならすぐ見ることのできるものである。又、明治になって入ってきた文明開化の一端を伺わせるようなものばかりである。進歩していく世界、変化する世界にとり残されていると感ずてもよいはずの病人がこうして積極的な好奇心を働かせている。その好奇心が満たされた時、子規は「楽しい」と言い、あるいはこれにつながる「面白い」という言葉を使った。

家人―特に妹の律などにはわがまま放題にどなつたり、あたり散らしたり、癩癩を爆発させたりした。又、親しい門弟を厳しく批判することも多かつた。

しかし「病床六尺」の中で腹を立てている文章など皆無である。その第一回に「読めば腹の立つ事、癩にさはる事、たまには何となく嬉しくて為に病苦を忘るる様な事が無いでもない」とあるが「病床六尺」に見られるのは批判や攻撃的な怒りの表現でなく、「病苦を忘るる」ような、嬉しいこと、楽しいこと、面白いことばかりである。カリエスになって最初に書かれた「松蘿玉液」に見られた当代の詩人や伊東博文、大隅重信に対する痛烈な罵倒、

非難、又、「歌よみに与ふる書」に見られる歌人達への毒舌にも近い非難といったものはすっかり陰をひそめてしまった。それは文語体から平明自在な口語体への文体の変化ともなつて表われている。

長い病床生活の、このような心境の変化は大局的にみれば、キューブラーロスがいうような死を告知された時の「怒り」から「受容」へと変化する心境に対応する面もあるように思われる。それは子規が中江兆民を評して「あきらめるより以上のことを知らぬ」といい「居士をして二、三年も病気の境涯にあらしめたならば、今少しは楽しみみの境涯にはひる事が出来たかも知らぬ。病気の境涯に処しては病苦を楽しむといふことにならなければ生きて居ても何の面白味もない」(第七十五回)と書いたのに通じる態度でもあり、兆民の「一年有半」に見られた攻撃的な怒りをまだ病者として未熟なものと捉える考えにも通じる。一言で言えば病いを生きるその生き方を子規は「境涯」として確立していったように思われる。

子規は病いの中にあつて、いつも「面白い」ことを見つけようと努めた。感動や感興、知的な発見、生活上の楽しいこと……それらの面白さを発見することは、病床の大きな喜びとなった。それが又、書くことにもつながった。それは面白さを人々と共有するということでもある。一人で楽しむのではない。自らの楽しみを語り、人々と共に楽しむのである。楽しみを共有する相手は病床を訪れる弟子達であり、「日本」新聞で子規の文章に接する読者である。

子規は「日本」新聞に書くことをやめられなかった。子規が「楽しい」と最後まで言い続けることができた背景には子規をとり巻く人々の存在―彼の語ることに興味を示し、彼の「楽しい」という心に感応し、なるほど「楽しい」「愉快だ」「面白い」といつてくれる人々があり、又、子規を楽しませようと様々な物を届けたり、趣向を工夫した弟子達の存在があつた。子規が「楽しい」と言ひえたのは彼が孤独でなかつたこと、仲間と共

にいて親しく語り合えるような存在だったことを示している。子規の命は子規一人の生物学的な命でなく、「語る」「書く」という社会的な行為の中にあつた。語らざる子規、書かざる子規は肉体は子規でも、もはや命なきものであつた。だから子規はその病状を気づかつて休ませてやろうとした「日本」新聞の古嶋一雄に次のような手紙を書く。

「拝啓 僕ノ今日ノ生命ハ『病床六尺』ニアルノデス 毎朝寝起ニ死ヌル程苦シイノデス 其中デ新聞ヲアケテ病床六尺ヲ見ルト僅ニ蘇ルノデス 今朝新聞ヲ見タ時ノ苦シサ 病床六尺ガ無イノデ泣キ出シマシタ ドーモタマリマセン 若シ出来ルナラ少シデモ（半分デモ）載セテ戴イタラ命ガ助カリマス 僕ハコンナ我儘ライハネバナラヌ程弱ツテキルノデス」（明治三十五年五月二日頃）

古嶋一雄は子規のこの書くことに対する命懸けの熱意と真剣さにうたれて「病床六尺」を以後毎日、連載すると約束した。こうして「病床六尺」は子規の死の二日前まで「日本」新聞に発表されることになった。ただ書くことが楽しいだけなら、別に新聞に発表しなくてもよかつたはずである。しかし、新聞に発表することが楽しみであり生きがいなのである。発表の場を与えられないということは殺されたにも等しかつた。「載セテ戴イタラ命ガ助カリマス」という子規の切ない懇願には、書くことによつて人々とつながっていること、もしそれが断たれるなら社会的に抹殺された孤独な病者としてしか生きられないことを恐れる気持ちがあつた。

その命自体もその肉体の衰えに対して予想外なほど奇跡的に長らえることができたのである。子規の命は気力の賜物であり、その気力は書いて発表するという社会的な仕事に支えられていたと言えよう。

## 六

「病床六尺」の第二百二十三回以降は一文から二文、三文位で一章をなすきわめて短いものであり、その内容も病苦のすさまじさを伺わせるものばかりである。と言ってもそこには子規一流のとぼけたユーモアがあり、死苦にも近い苦しみも深刻さ、まじめさとはほど遠いものがある。

「支那や朝鮮では今でも拷問をするそうだが、自分はきのふ以来昼夜の別なく、五体すきなしといふ拷問をうけた。誠に話にならぬ苦しさである」(第二百二十三回)

「人間の苦痛は余程極度へまで想像せられるが、しかしそんなに極度に迄想像した様な苦痛が自分のこの身の上に来るとは一寸想像せられぬ事である」(第二百二十四回)

「足あり、仁王の足の如し。足あり、他人の足の如し。足あり、だいばんじやく大磐石(一大きな岩)の如し。僅わずかに指頭を以てこの脚頭に触るれば天地震動、草木号叫、女鍋氏未だこの足を断じ去って、五色の石を作らず」(第二百二十五回)

第二百二十三回は九月十二日に「日本」新聞に発表されたものだが書いたのは九月十日である。子規はこの中で自分のなめつくしている病苦を「拷問」に喩えているが、このころ寝たきりの生活のため足の水腫がひどくなり、腰から下は動かせなくなっている。薄団を横にして仰臥し、左右の足を右横にして倒して動けず、特に左足の重ね具合により激痛が走るので看護の者が左膝を支え続ける。極限に近いような苦痛だが、一方でこの夜、「蕪村句集」の輪講会を開くように指示する。鳴雪、虚子、紅緑、碧梧桐が参加、子規は背を向けたまま意見を述べる。途中で苦痛が激しくなったので中止しようとする、子規は継続するように指示し予定通り十二句を論考、鳴雪と紅緑が去ろうとする時に「御大事に」と言うと「ありがとう、明日までに死ぬかもしれません」と答えたという。(子規

全集」第二十二卷）言語を絶するような苦しみのさ中であつて句会を開き、こうして散文をものす。病苦を味わう人は多いがそれを「拷問を受けた」と喩え、「誠に話にならぬ苦しきである」などと、ユーモア交りに書く人はめつたにいたるものではない。虚子は「居士は斯の如く何事にも研究的で、病いを忘れ死を忘れ一日生きてゐれば一日研究するといふ態度で、すべての事に向かつたのであつた。居士の病苦の慰藉いしやは一にこの研究其のものにあつた」〔子規居士と余〕とこのころの子規について記しているが、古典の研究會や句会を続け、新聞にこうした文章を発表するのは「病苦の慰藉」でもあつたらう。

第二百二十四回も不謹慎な言い方だが面白い。前回で「拷問」と喩えたことがここにも響いている。釜ゆでの刑、火刑、磔刑たっけい、残酷な死刑の場面を想像し、どんなに痛く苦しいだろうと人は想像する。想像はできてもそれは他人事のようにみているわけで、わが身のこととしてはなかなか想像しにくい。そもそも苦痛そのものが個体としての肉体に根ざす感覚であり、自分がじかに体験としてその苦痛を味わわない限り、容易には知りえぬものである。想像しても実感がわからない上に、人間には苦痛を我がこととして考えない、他人事と思いたがる心理的な癖がある。そんな人間の心理を発見して興じている子規の姿がここにはある。この文章の後には「そんなことに気づいて、この時大変面白かつた」という気持ちこころが潜んでいたのであろう。

第二百二十五回は漢文のパロディである。「女鍋」は伝説上の皇帝で人面蛇身、天柱が欠けた時、五色の石を練つて補つたという。子規は寝たきりのために足が異様にふくれあがつた。それは誠に気味悪いものだった。即ち第二百二十二回に「一日のうちに我が瘦足の先にわかに腫れ上りてブクブクとふくらみたるそのさま火箸のさきに徳利をつけたるが如し。医者に問へば病人にはありがちの現象にて血の通ひの悪きなりといふ。とにかくに心持よきものには非ず」と記した。そのふくれあがつた足先を第二百二十五回で「仁王の足」「大磐石」に喩える。その足に少しで

も触れると激痛が走る。子規にとってその激痛がすべてである。この激痛を除くには死ぬしかない。今のこの痛み果てた肉体は滅びるしかない。死んであらたな肉体を得るしかないという思い、それが「女鍋」を思い出させた。それにしても「天地震動、草木号泣」という言葉は激痛に泣く者の全世界を表現している。ここには麻痺剤もきかず、「苦」一字の世界で、動物的な苦しみに絶叫号泣している子規があるしかし、それでも「五色の石を作らず」――新しい肉体が用意されているわけでもなく、この痛み果てた痛む体に耐えつつ生きるしかない。表現することはそのような病苦を耐えるささやかな方法、慰めであった。

このような病苦の記述の後に続く第百二十六回は全くたわいのない臭気の話である。

「芭蕉が奥羽行脚の時に、尾花沢といふ出羽の山奥に宿を乞ふて、馬小屋の隣にやうやう一夜の夢を結んだ事があるさうだ。ころしも夏であったので 蚤虱馬のみしらみのしとする枕許まくらもとといふ一句を得て形見とした。しかし芭蕉はそれ程臭気に辟易はしなかつたらうと覚える」

死も近いと思われるような状況にあつて芭蕉を思い浮かべるなら、その辞世の句「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」を思い浮かべ、その死を思い、自らの生涯を回顧するしみじみとした感慨の言葉をつらねるのがむしろ普通かもしれない。しかし、子規の末期の意識に浮かんだのは奥羽行脚の時、蚤虱、馬の尿に悩まされた芭蕉の姿であり、その芭蕉が臭気のこととはさほど気にしなかつたやうだといふ発見である。何と卑近なささやかな話であろう。しかしそのささやかな発見、思いつきが面白かつた。その臭気の話が連想をよんで次のような文章を子規は続ける。「上野の動物園にいつてみると（今は知らぬが）前には虎の檻おびの前などに来ると、もの珍し気に江戸兎のちゃきちやきなどが立留たちどまっていて鼻をつまみながら、くせえくせえなどと悪口をいつて居る。その後へ来た青毛布のぢいさんなどはいつこう、匂ひなにかには平気な様子で唯虎のでけえのに驚いている」

これ又、ささいな下品な話だが面白い観察であり、愉快的文章である。このようなたわいもないような些事に興ずる背景には、毎日のように弟子達が訪れ談話しているということがあろう。子規は死をみつめ、自分の生涯を回顧したり悲しんだりすることより、俳人や人間についての発見、観察を楽しんでいる。これらの文章は子規を囲む仲間のうちで思いつき、語られた言葉ではなかったらうか。一般には孤独を感じ、悲嘆にくれがちな死の床にあって、目を外に向けささやかな発見を楽しみ、人々と共に生きている子規の姿がここにある。

「病床六尺」の第二百二十七回（最終回）は次の文章である。

「芳菲山人ほうひより来書。拜啓、昨今御病床六尺の記二、三寸に過ぎず、すこぶる不穩に存じ候間、御見舞申し上げ候。達磨儀も盆頃より引籠りひきこも繩鉢巻なわはちまきにて笥かげいの滝あらしやうに荒行中 御無音致候。俳病の夢みるならんほととぎす拷問など誰がかけたか」

この文章は芳菲山人からの手紙を全文そのまま転載したものである。

「芳菲山人」は本名、西松二郎といい、長崎県出身、安政二年（一八五五年）生まれの理学士（理科大学卒業）である。理学士でありながら一方で狂歌を趣味とし、又達磨の蒐集家としても知られていた。雅号は「芳菲」―芳しい草の意であるが、その裏に「放屁」をかけたもので、いかにも狂歌師らしいユーモアがある。彼は「日本」新聞の愛読者であり、特に子規の文章を愛読していた。その西芳菲から子規に書簡が届く。「拜啓」以下最後の狂歌までその全文である。つまり子規の書いたのは冒頭の八文字に過ぎない。

子規はこれをどんな気持ちで読んだであろうか。

書簡の内容は「病床六尺」が近頃二、三行と短きに至っている。これは病状が悪化したことを示すものではないかと心配されるのでお見舞申し上げます、という言葉に始まる。



確かにこれまでみてきたように第二百二十三回、二百二十四回、二百二十五回といずれも短く、苦しみを伝える文章であり読者として子規の病状が気がかりであったろう。事実、この数日後に子規は死を迎えることになるのだが、こんな場合、見舞いの言葉も渋りがちなものである。だがそこは狂歌師である。「達磨儀も」というのは彼が達磨の蒐集家としても知られているところから自分のことを言ったもので、滝に打たれて荒行中だというのは達磨にことよせた縁語的な修辞で、要するに多忙であったためにごぶさたしました、と詫びているわけである。滝といつても「笥の滝に荒行中」というところにまた諧謔もある。本物の滝に打たれての荒行ではなく庭の小さなかけどいに打たれて―おそらく静かな所に暮らして勉強でもしていたのであろう―の「荒行」だとユーモアをもって慰め、得意の狂歌で手紙を結んでいる。

上の句の「俳病の夢みるならん」とは、芭蕉の「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」を踏まえた表現であろう。又、「俳病」は「俳句」と「肺病」をかけた言葉で、芳菲山人は子規の文学が「肺病」に始まる「俳句」―俳諧のユーモアを含んだ文学であることを熟知していた。下の句の「拷問などに誰がかけたか」というのは第二百二十三回で子規が「自分はきのふ以来昼夜の別なく五体すきなし」という拷問を受けた」という文章を意識した表現だが、同時にほととぎすの鳴き声の「ほととぎすかけたか」を掛けた言葉でもある。

「病床六尺」の第二十五回に芳菲山人が梟ふくろうの鳴き声を各地で何とか情報をつのつたということが紹介されている。そして自分の故郷の松山では「フルツク、ホーソ」と鳴けば「雨が降る」、「ノリツケ、ホーソ」と鳴けば「明日は晴れだ」という風に天気を予報する言葉としてその鳴き声を解釈しているということが記されている。これと同じように、ほととぎすの鳴き声を「ほととぎすかけたか」と聞きなすのは全国的に知られていることだが、これを芳菲山人は「誰がかけたか」ともじって一首とした。つまり、この狂歌はおよそ次のような意味であろう。―

あなたは肺病の死も近い病床にあってなお俳句のことを夢みているのでしょうか。（わが身をさいなむ苦痛をあなたは拷問を受けたと記しておりましたが）ほととぎすは「ほつちよかけたか」と鳴くと聞いています——一体誰があなたを拷問などにかけたのでしょうか。

子規自ら書いたのは冒頭の八文字「芳菲山人より来書」にすぎないとはいえ、これはいかにもその最期の散文としてふさわしいものだと思には感じられる。第一に、その狂歌が子規の生涯をよく表わしている。子規という雅号が、ほととぎす病——結核を意味し、結核を通して文学者子規が誕生し、その病いがさらに悪化してカリエスとなる、そのような病いの深まりと共に子規はますます「俳句」——俳諧のユーモア、風雅の精神に遊び続けた。まさに「肺病の夢みるならんほととぎす」であった。その意味で「旅に病んで夢は枯野をかけめぐる」と芭蕉の生涯を暗示する句とするなら、この狂歌の上の句も見事に子規の人生を示しているのである。

第二に、他人の書簡が自分の作品として使われているという点にも子規らしさがある。

書簡とは私信のやりとりであるが、思えば子規の文学は初期の随筆「筆まかせ」にも見られたように、友人との書簡のやりとりをそのまま作品として紹介していたし、「日本」新聞に公表した随筆も、自分の病状について述べたり、身辺の雑記など個人的な生活の報告でもある。「歌よみに与ふる書」も書簡のスタイルで書かれている。子規は新聞という公器を私的な交流の場としても使っていた。「日本」新聞を読んで俳句や短歌に目を開かれた人も多いが子規の病状を知り、その人間性に触れた人も多かった。芳菲山人の病中見舞の書簡はそのような読者の声を代弁するものでもある。

しかし子規の病状は通り一辺の励ましや慰めなど通じるものではなかった。健康の回復を祈ったり、一日でも命長からんと祈ってもそれは子規の怒りを買うだけであつたらう。事実、石井露月の子規の長命を祈る手紙に対して

立腹したこともある。その点、狂歌の見舞状こそ最も子規の心に通うものであった。募る病苦の中にあつてもユーモアを忘れず、苦しみを笑いの種にする、これこそ子規がその生涯をかけて貫いた精神であつたからである。子規はこの芳菲山人の手紙について一言も感想を述べていない。この狂歌は考えようによつては病者を愚弄する腹立たしい歌とよめないわけでもない。しかし、子規は微笑のうちにこの書簡を書き写したのではなからうか。平然としてこのような狂歌を載せ、自分の病苦をも読者と共に笑いにしているところに生死を超越した、こだわりのない自由な心がある。それは「糸瓜咲きて痰のつまりし仏かな」と己れを「仏」と捉えて微笑し、自分の葬儀の時「談笑平生のごとくあるべく候」と遺書を記した心に通うものである。西芳菲の子規を見舞うこの書簡に子規は自らの心を投影させて、「病床六尺」の最後の文章―子規最後の散文としたのである。

二人の出会いについてここで改めてふり返つてみよう。二人は直接、相まみえてはいない。文通による友であり子規の友人分類にならつて言えば「書友」であつた。狂歌を添えた病氣見舞いの書簡、これが子規と芳菲山人をつなぐ絆だつた。西芳菲が子規に初めて書簡を出したのは明治二十八年七月二十六日のことである。日清戦争従軍の帰途船中で大咯血をみた子規は、このころ兵庫県の須磨保養院で生死の間をさまよつていた。西芳菲は「日本」新聞の読者で、「日本」新聞を舞台として繰り広げられた子規の文学活動―「瀬祭書屋俳話」による俳句革新など―を知っており、従軍のことも知っていたから、「読者を代表して」（書簡の中にこの言葉を使っている）見舞いの手紙を出した。

手紙には八首の狂歌が入っておりいずれもユーモアと諧謔のうちに病床の子規をいたわり、慰めようとするものである。その幾つか引いてみよう。

「泣かずとも笑ふてやれよほととぎす世はうの花のばか盛りなり」―ほととぎすよ、泣かずに笑つてくれ。世の中

は卯の花がこんなにもたくさん咲いているのだから。ほととぎすという名をもつ子規よ、泣かずに笑顔を見せてくれ、世の中には、あなたと縁のある卯の花が真つ盛りなように、あなたのことを案じている人も多いのだから

この狂歌には「憂うつは御療養の毒ならん」と詞書が添えられ、病気を嘆き、心配するのはかえって療養のためにも良くないからと狂歌によって子規を笑わせようとしたものである。さらに又次のような狂歌が添えられている。

「村雨もはるる浦はのほととぎす 不如帰不如帰とみんなまつ風」——にわか雨もやがて晴れ、海岸にほととぎすが帰るに如かず、帰るに如かず——お帰りなさい、帰る方がいいですよとみんな待つて風に吹かれています、それと同じ様にあなたが元気になって帰るのを「日本」新聞の読者一同待っておりますよ。

子規はこの手紙に対してやはり狂歌をもつて返事を出した。その手紙に言う。

「御手紙拝見つかまつり候。時々不順の氣候に候処、ますます御清榮恭賀奉り候、愚生病氣につきわざわざ御慰問に預かり難有奉存じ候、追々快方に赴き候間、憚りながら御放慮是れ祈り候。御惠投の狂歌時にとりて面白く拝誦致し候、つれづれのあまり我もひそみにならはんなどとおこがましく候へども（＝厚かましく思いますが）実は初学（＝初心者で）のういういしき処、幾重にも御引立の程願ひ上げ奉り候」と述べた後、次のような狂歌でこれに応じた。四首あるが二首引いてみる。

「夏の日のあつもり塚に涼み居て病氣なほさねばいなじとぞ思ふ」——「須磨に病をやしなひ」という詞書が添えられている。今自分は須磨の平敦盛を祭る塚近くにいて病を養っているが、その敦盛と闘った熊谷直実——その直実ではないが、病気を治さないうちは出まいと決心していることだ。

「お手紙の狂歌あすかとまつ風にまた日数ふる村雨の空」——これには「この頃の雨天続きに気もむすばれてとけぬ折柄かかる御消息のうれしく覚えて閑居の心をなんなくさめ侍る」という詞書が添えられている。お手紙のその「狂

歌」ではありませんが、「今日」か明日かと待っているうちに、日数もたち松風が吹きまたにわか雨の降る空となってきました。またの御便りをお待ちしています。

これを見て芳菲山人は「初々しからぬ御口並の玉吟感詠つかまつり候」と子規の狂歌を評価している。

狂歌を仲立ちとする子規と芳菲の交流は子規の大嗜血―カリエスの始まりでもある―をもって始まり、「病床六尺」の最後をもって終わる。そこには因縁めいたものも感じられる。子規は芳菲の狂歌に七年前を思い起こし、これに応ずる狂歌をできれば詠みたかったであろう。しかし最後の一滴まで使い尽くし、働き尽くした子規の心と体はもはやそれは不可能だった。そういう状況の中で、こうして公表することがせめてもの返事であり、感謝と笑いの中にその書簡を書き写したのではなからうか。

病床に臥して痛みの暇をみつけては書きついでいくという子規の書き方は体系的・系統的な書き方ではなく、その時、その時の、面白い発見、情報に触発されて書いていくというやり方である。「病床六尺」の第二回に「近來頭のわるくなると共に理屈臭いものは一切読めぬことになって、遂には新聞などに出ている銃獵談をよむほど面白く心ゆくことはなかった」という一節がある。「頭がわるくなる」というのは、病苦のためねばり強く論理的にものを考えることができない状態をさすものであろう。思えば子規は「懶祭書屋俳話」や「歌よみに与ふる書」などという連載形式の俳論、歌論をもした鋭い論客でもあった。しかし「病床六尺」には、そこに見られたようなねばり強さや啓蒙的な姿勢、鋭い論理、怒りにも近い革新の情熱がない。それに代わって子規が求めたのは己れ一人の「面白くて心ゆくこと」であった。「心ゆく」とは、心満ちたり、晴れ晴れとした楽しい明るい気分になることである。子規はともすればふさがちな病床にあつて、何とか心楽しく生きようとした。それは病いを生きる工夫として自覚的に求めた「面白さ」である。この「面白さ」は用不用を越えた無心な遊び心、童心にも近く、書くこととの前提として、まず「面白い」と感ずる心の動きがあり、書くことよってそれが一層面白くなるというふうであつた。又、書いているうちに面白くなったり、面白く書いてみようという工夫でもあつた。「面白い」や「楽しい」という言葉は「病床六尺」のキーワードである。それは病苦を生きる子規の工夫が、いかにしてこの「面白い」こと「楽しい」ことを発見し続けるかという点にあつたことを示している。

病苦の中にあつて面白いことを発見しようとするのは、精神のバランスを保とうとする本能に近い働きかもしれない。明治二十九年三月十七日、自らの病いがリウマチスでないこと——つまり、カリエスだということを医師に知

らされたことを報ずる虚子宛ての書簡の中に次のような一節がある。

「何か面白くてたまらん一切の事物を忘れてしまふやうなもの欲しと思へり。忽ち思ひ出しことあり枕頭を探りて反故堆中ほごたいちゆう（『書き損じて捨てた紙の中』）より『菜花集』を探り出して『糊細工』を読み初めぬ。面白し面白し。覚えず声を出してホホと笑ひたる処さへあり。この笑ひ程僕を慰めたる笑ひはなかりしなり。忽ちにして読みをはりぬ、余韻じゆう 嫋々しょうじやうとして（『長く続いて』）絶えざる感あり。天ツ晴れ傑作なり。貴兄集中の第一等なりと感じぬ。この平凡なる趣向、卑猥なる人物、浅薄なる恋が何故に面白きかほとんど解すべからず、されども僕はたしかに、しかく感じたり」

カリエスの告知、それはどんなに強がってみても辛い、面白くない、気の沈みがちなものであった。その重く沈みがちな気分を高揚させるものを求める。それによつて精神のバランスを保とうとする。子規の文章が重い病氣の中にあつて向日的な明るさに満ちているのは病氣に負けまいという精神の反作用であつた。子規はここで虚子の「菜花集」をひもといひ、そのあまりの面白さに一人笑ひする程だつたと言ひ、平凡なこの作品がどうしてこんなにも面白く感ぜられるのかが自分でも不思議だと述べている。「菜花集」は虚子が碧梧桐達と共に作つた小説の回覧集であり「糊細工」はその中の一編で虚子の作品である。後の写生文の先駆けをなすものであつたというがそれは普通段なら、さ程面白いと感ぜらうなものではなかつただろう。それをこんなにも面白いと感じたのは子規自らいふやうに不思議なことといわねばならない。おそらくここに死の宣告を受けた時の感受性の変化があると思われる。この点について虚子は次のように記している。

「この手紙にあるごとく医師から結核性脊髄炎といふいよいよ前途の短い病いであることを宣告された時に、居士の頭には例の社会的の野心問題が頭をもたげて一時は烈しい精神の昂奮を感じたのであるが、それを忘れるために

何物かを探した時、そこに所謂『平凡なる趣向、卑猥なる人物、浅薄なる恋』を描いた余の作物（『「菜花集」を指す）に接して、居士の心はかえって何物かに救はれたやうな慰安を感じたものと見える」（「子規居士と余」）

子規はカリエスの告知を受けた時、一方で俳句の世界のみならず文学の世界全体に大きな影響力をもつ大文学者たらんとする「野心」「大望」——「社会的の野心」を痛切に意識し「昂奮」し、焦燥を覚えた。しかし他方、野心も何も捨てた平凡な日常、平凡な人物、平凡な出来事に「慰安」を感じた。この「慰安」とは名声欲に窮々とする子規が、自らの心を解放して、自由な慰めを得ることだった。子規がこの後提唱した写生文、あるいは「病床六尺」にみられる日常卑近な生活の中に面白さを見出していく心は、「野心」「大望」の自縄自縛から自らを解き放つ道でもあったようだ。

健康な人間は外に出歩いて様々な面白いことを見、聞き、体験できる。病床に生きる人間はそれができない代りに、普通の人が無駄な事として見逃していることに面白さ、味わいを発見する。平凡で、ささやかな日常に対する深い関心、それは病者の生に与えられた賜物なのかもしれない。

明治三十三年一月二日から子規の所に参じ、直接その日常に接し、教えを受けるようになった伊藤左千夫は「竹の里人」で次のように書いている。

「先生が理性に優れて居った事は何人も承知している所だが、又一方にはひどく涙もろくて情的な氣の毒な弱い所があった人である。それはおそらく長らく患って寝ていたせいでもあらふけれども非常に腹立って、涙をこぼさず、果ては声を立てて泣くような事が珍しくない、そのかはりタハイない事にも悦ぶことがある」

子規は確かに「理性に勝れ」、俳論や歌論など自在なものし、古典の世界に通じた意氣軒昂たる、舌鋒鋭き論客であった。左千夫はそのような論客、子規の信念に打たれてその門に参じた。しかし、直接その日常に触れてみれ



ば、意外にも正直、素直な感情の人であり、しばしば腹を立て、泣き、喜び、しかもそれを何の見栄も外聞も気にせずには表わす無邪気な人であった。

左千夫はさらに続けている。

「大詩人の言行として、さもあるべきはずではあるが何事につけても人並みよりは多くの興味を感じつつ居たらしかった。多くの人の何でもなく思っていることやごくツマラぬ事で一向、顧みもしないやうな事でも、先生は頻りと面白がつて一人興懷に耽けるといふやうな事が珍しくなかつた。従つてたわいもない事も子どもらしく興に乗つて浮かれるやうな事があつた。それは趣味の広い人であるから、面白味を感じる区域が人よりも広いは当り前ではあれど随分意外に思ふ事も多かつた。」

なるほど子規の面白がり方にはただならぬものがある。そのただならぬ面白がり方が「病床六尺」を書かせている。例えばその第一回において、子規は柏島という小さな島にある水産補習学校のことを紹介している。教室が十二坪、事務室と校長室は一緒で、校長の給料は二十円、しかも四年間昇給なし、その学校では実習によつて得た金を郵便貯金しておいて、修学旅行の費用としている：そのような学校の話を読者に紹介した後、「余はこの話を聞いて涙が出る程うれしかった」と子規は記す。なるほどこれは美談には違いないが、果たして「涙を流す程うれしい」というのはどうか。おそらく子規の病床を慰めるつれづれな話として誰かが語つたものであるが、それに対する子規の面白がり方、うれしがり方は普通の人からみて大げさな感じがしよう。しかし、これはわざと大仰に書いたというのではなく、子規の素直な実感だつたのではないか。

一國を論じ一國を動かす—子規にとつてそれは少年時代の夢であつたが、今はそんなことはどうでもいいのである。「野心」も「大望」もない。無名人のささやかな善意、ちよつとした生活の工夫、それが子規にとつてかけが

えもない程尊く感じられ、又興味深いのである。これはその話の価値自体より、子規の面白がり方がむしろ面白い、というべきである。読者はこうして子規の面白がり方にいつのまにか感化されて、そのささやかな善意に感じ、いい話だ、面白い話だと感じるようになる。そんなふうにして子規の発見した面白いことにつきあつていく。それがこの連載を読む楽しみであつたらう。左千夫はそれを「病床六尺」を読んだ感想としてではなく、病者子規の生き方にじかに触れた感想として述べている。

「絵画について嗜好は次第に強烈になつて、絵であればどんなものでも面白がつて見る様で、ある時陸翁の娘の六ツばかりになる子が書いた絵をこんな面白いがどうだと見せられたこともあつた。晩年自分で絵を書くようになってからは一層嗜好の熱度を高めた。渡辺南岳草花の巻物に狂気じみた事をやつたに見てもその熱度がわかる。もう長くは生きていぬと承知しながら、是非、其の草花の絵を我物にしたいという執念、何という強烈な嗜好であろう。趣味の興快に乗じて自己の命を忘れるのである。自分の字がいやになつたから、少し仮名文字を習つてみたがよい手本はあるまいかと問われたのも逝去二月ばかり前のことであつた。

おかしく気取つて死に際を飾ろうとするような手合とはまるで違つて思われる」

ここにいうように「病床六尺」を書いているころ、子規は絵を書くことを楽しみとし、又その鑑賞を楽しむようになった。「渡辺南岳の草花の巻物に狂気じみた事をやつた」というのは皆川澄路の所有するその南岳の絵を鈴木芒先生、伊東牛歩が持参して子規に見せたところ、子規はこれが大層気に入つて、譲つてくれと言ひ出した。しかも再度にわたつて繰り返し懇願するので牛歩は困つてしまった。そこで碧梧桐と相談して、子規の死後には必ず返却することを約束した上で、子規には譲られたということにしておいた。そんなこととはつゆ知らぬ子規は、ほしくてならなかつた南岳の絵が手に入ったことに「嬉しいのなんのとて今更いうまでもない。お嬢さんの名は南岳草

「花画卷」と、絵を好きな「お嬢さん」——恋人にしたてて、その絵が手に入った喜びを記している（「病床六尺」の百三、百四）

好きなものは何としても手に入れたかった——これは子供じみたわがままではある。しかしここで子規は、己れを忘れて楽しいものを見つけて、それに没入している。まことに天真爛漫な無邪気さである。この時、子規には昨日も明日もない。ただ今現在の喜び、味わい、それがすべてであった。左千夫は更に続けて書く。

「趣味を貪っては飽くことを知らぬという調子であったから日夕の飲食にも始終趣向趣向といつて居った。まして二三人の会食でもやるとなれば趣向問題が湧返ったものである。振った振わぬのと翌日の談話にまで興を残した位であった」

「趣向」とは一般に連歌や俳句で趣・面白さを出すための工夫をいうが、子規は病床生活においてこれをきわめて大事にした。それは何とか生活を面白くし、生きることを楽しくしようとするささやかな工夫である。子規のもとに参じた人は皆、子規を楽しませようと「趣向」をこらしたり、子規の「趣向」にあづかって共に楽しんだのである。

病床六尺の閉ざされた狭い世界に生きる子規が生活の中で工夫した趣向がその文学活動の背景にある。書かれたものは子規の生活のうちに根ざしている。その生活上の趣向とその表現とのかかわりを幾つか具体的に示してみよう。

病床にあつて何か面白い話をするのは趣向の一つだったが、たとえば、ドンコ（ハゼ）釣りの話や松山に池が多い話、フランネルからセルの時代に移った話などを碧梧桐としたことがある。（明治三十五年五月八日）これは「病床六尺」の第五回の材料となっている。

このように親しい人と談話することを子規は病床における大きな楽しみとした。未知の人でも何か面白い話をもっている人なら誰でも歓迎した。病苦が募つて会えないこともあるかもしれない、と断りながらも子規の門戸はいつでも開かれていた。その子規の声に応じて人々が訪れた。それが子規の文学活動を支えた。

虚子が訪れた時、二人で画帖を出して一緒に見てその感想を語りあつたことがある。（五月十日）子規はその感想を虚子に口述筆記させて「病床六尺」の第六回とした。病床での談話がここでも文章へとつながっている。

子規は四季折々の行事を大切にし、弟子達とこれを楽しんだ。たとえば子規庵の近くの三島神社の祭礼の時、豆腐汁や木の芽あえ、葡萄酒でこれを祝い、「不消化な料理の夏の祭りかな」など八句を作った。（五月十五日）これも楽しい趣向であつたがこの日の記事は「病床六尺」の第九回の材料となつており、当日の句もそのまま紹介されている。「豆腐汁木の芽あへの御馳走に一杯の葡萄酒を傾けたのはいつにない愉快であつた」とその一節にある。

しかしその日の午前、苦痛はなほだしく、声も弱り松山の親族へ「サヨナラ ネギシ」と電報を出そうかなどと

いい、石膏の自身の像に「土一塊牡丹生けたる其の下に」などと絶句めいた句を記したりもしていた。第九回の前半に「未曾有の大苦痛」を味わったこと、「心臓の鼓動が始まって呼吸の苦しさに泣いてもわめいても追っ附かず」とそのころの病苦の様が描かれており、その日の午後の楽しい趣向であったわけである。

趣向の一つとして、常磐会の舎監であった内藤鳴雪の求めに応じ、書画帖に芍薬を描き、句を添えたこともある。(五月二十六日)。「求めに応じて」ということではあるが子規自身の趣向―楽しみとしてしばしば絵に句を添えたものを試みていたから、いやな義務ではなく楽しみつつ筆をとったに違いない。これは「病床六尺」の第二十四回に「近作数首」として、「芍薬の衰へて在り枕許もと」などの句として紹介されている。「近作数首」として記された他の句をみれば、その詞書に「悼清国蘇山人」「送別」「欧羅巴へ行く人の許へ根岸の笹の雪を贈りて」「無事庵久しく病に臥したりしが此頃みまかりぬと聞きて」などと記されており、多彩な交流をしのばせる。人と交流し、その証として俳句を作ること、これも又、子規の趣向だった。

病床の子規の周辺には数々のものがあつた。それらは人から贈られたもの、自ら買い求めたもの、様々であるが、それを眺めるのも、これまた病苦を慰める趣向となつた。「病床六尺」の第二十六回に、「今日只今病床を取巻いている所のものを一一数へてみると何年来も置き古し見古した蓑、笠…」という書出しでこれらの物をとりあげている。人から贈られた物にはその人の親切がこもり、思い出もこもっている。それを語る子規は実に楽しげである。「写真双眼鏡、これは前日活動写真が見たいなどといふところから気をきかして古州が贈ってくれたのである。小金井の桜、隅田の月夜、田子の浦の波、百花園の萩、何でも奥深く立体的に見えるので、外の人は子供だましたといふかも知れぬが、自分にはこれを覗くのが嬉しくて嬉しくて堪まらないのである」―自ら外の出歩いて様々な物に触れることのできない子規のもとに、様々なものが集まって、子規を慰めるかのように目の届く範囲に置かれてい

る。それを見て子供のように楽しんでる子規の姿がここにある。この他、河豚提灯や喇嘛教の曼陀羅、大津絵、丁字簾といった工芸品から花菖蒲、蝎取撫子、美女桜、ロベリア、松葉菊などの草花に至るまで、ささやかな物品の一大集積地のような感じのある子規の病室である。そして、それがそのまま「病床六尺」の記事にも連動していた。寝たきりの病者が連載という形で随筆を書き続けることができたのは子規のこの趣向を楽しむ心と、門人や知人達の協力があったからである。

子規はたわいもないものを喜んだが、その喜ぶ子規を見るのがうれしくて人々は様々な工夫をして子規を慰めた。そうして子規の喜びはそのまま門人達の喜びとなった。子規が面白がると、弟子達にも確かに面白いように感じられた。病者子規の喜びに対する感受性はそのまま門人達に伝染したようである。伊藤左千夫の「竹の里人」はその子規の無邪気な喜びが、いかに周囲の人にも感染したかを語っている。

趣向ということに関しても一つ指摘しておきたいのは、これが風流を遊ぶ俳諧の伝統に根ざしたものであり、子規の個別的なもの、即物的、具体的なものに対する関心と結びついているということである。それは一面では日本文化の伝統―花をめで、月をめで、様々な行事遊びを工夫し、共に楽しむという座の文学の精神につながるものである。子規は二十四才の時から「俳句分類」という古典俳句を季語によって分類する作業に取り組んでいたが、季語という自然と文化を結びつけた語、それに精通することによって子規自身も季語を生きる生き方を育てていったようである。新聞社に出て時間を拘束されることのない、病床に生きるしかない子規は、むしろそのためにかえて季語によって生きる、俳諧の精神によって生きることが可能ともなったとも言えよう。

趣向ということとさらにつけ加えるなら、子規の書いた文章自体が一つの趣向の産物とも言える。「病床六尺」にみられる様々な文体の工夫―記事体・日記体・書簡体・名詞列挙体・談話記録体・俳句評・雑学的博物的な発

見、知識など―は子規の文体遊びであり、あらたな文体を工夫し作り出す趣向を楽しんだことの表われである。

「病床六尺」は基本的にはうちとけた口語文体で時に談話の口調もある。「松蘿玉液」にみられた漢文訓読体、「墨汁一滴」の優雅な古文体、「仰臥漫録」の非情な記録体に対し、子規はここで最も親しみやすい口語体を確立している。それは気負いのない平常心を述べるに最もふさわしい文体でもあった。

「病床六尺」には様々な弟子の影が見え隠れしている。子規は文学活動を個人の創作活動とみるだけでなく、文学書を編纂し、文学者を教育するといった社会的な活動とも見ていた。明治二十七年、日清戦争従軍記者として赴く決意を述べた虚子、碧梧桐二人に宛てた書簡の中で前者を「雅事」、後者を「俗事」と呼んだが、文学を社会的な活動としても見ていたことは、その創造活動―「雅事」にも又大きな影響を与えている。この点について虚子も「居士の門下に集ふ俳人はこの頃（注、明治二十九年）もすでに少なくはなかった。漸く病床を出ることが稀になった居士はそれらの俳人の訪問を受けて句作し評論する上に種々の便宜も多かった」（「子規居士と余」と書いている）。

「俗事」として文学書の編纂―これは虚子の手による「ホトトギス」の発行という形で実を結んでいた。「俗事」として、又、文学者を教育すること―子規は病床にあつてもこのことを考え続けた。病床を訪れる門弟達への教育や忠告を忘れなかった。虚子のいうように「母の愛が子を抱きしめるやうに、その一種の執着力はぢつと弟子や古文を抱きしめていて、たとひ、もがき逃れようとしても容易にそれを手離しはしない。さういふ点に於て、子規居士は十二分の執着―愛―を持つてゐた」（同）というような「執着―愛」は「俗事」としての社会的活動であつた。

明治三十一年二月十二日から三月四日まで十回にわたつて連載された「歌よみに与ふる書」は自ら歌壇の頂点に立ち、天下を支配下に置こうという気迫に貫かれていた。それは歌に対する思いでもあるが、当代の歌人達を導こうとするリーダーとしての宣言にも近い。これに刺激されて子規の所には又、新しい門人達が集うことになった。その中から初めに伊藤左千夫と長塚節のことを取り上げてみよう。



左千夫も節も子規晩年の――明治三十三年以降、子規との交流は三年に満たない――弟子であり、共に歌人、そして「日本」新聞を媒介として弟子になった人である。これは高浜虚子や河東碧梧桐、寒川鼠骨など子規と同郷、松山出身で子規に地縁によって近づいていき、俳句の感化を受けた人々と対照的な存在と言ってよい。

左千夫が子規を初めて訪れたのは明治三十三年一月二日のこと、「日本」新聞の元旦の新年雑詠が三首入選したことに始まる。左千夫はこの時、三十六才、子規より三才年上で本所茅場町で牛乳搾取業を営んでいた。

一方、長塚節が子規庵を訪れたのは明治三十三年三月二十七日、二十一才の時である。「歌よみに与ふる書」を讀んで「どうしても忘れられない」感激を覚えたのがそのきっかけだという。茨城県の田舎地主の家に生まれた節はこれ以後、しばしば子規を訪れ「根岸短歌会」にも出席、伊藤左千夫や岡麓・香取秀真らの歌人と交流するようになる。

「病床六尺」に二人がどんな形で登場するのか調べてみたい。「左千夫」の名が出てくるのは六回ある。第八十回に「午後四時過左千夫今日の番にて訪はる：庭前に咲ける射干を根ながら掘りて左千夫の家土産とす」とある。七月二十九日の日記というスタイルで書かれた記述の一節である。この頃、弟子達は子規の看病に当番制であたっていた。この日、左千夫が子規の看病にやってきた。そのことを記したものである。第八十八回の「今日の番にて左千夫来る」も同様で当番として左千夫がやってきたことを告げる。第九十九回には「松嶋のつと（||みやげ）くさぐさ（||種々、品々）は左千夫、蕨真（||蕨真一郎、林業に従事していた子規門の歌人）より まつしまの、をしまのうらにうちよする波のしらたま、そのたまを、ふくろにいれて、かへりこし、うたのきみふたり」とある。これは全体の題を「おくられものくさぐさ」として、一括されている中の一首である。内容は人から贈られたものを誰から何をという形でまとめ、それぞれに短歌や長歌を添えた札状の歌と言ってよい。松嶋のみやげとして左千

夫と藤真が袋に入れて持ち帰った「白玉」とは何かの美しい石のことでもあろうか。札状をこうした歌の形でした。ためるといふのは、日本文学の伝統でもあり、子規の創造性はこのような日常の生活に密着した場で発揮されていた。

また第二百二十二回には次のような記述が見える。「左千夫いふ。生の悪き牛、乳を搾らるる時、人を蹴ることあり。人之を怒って大に鞭撻を加へたるが上、足をしばりつけ、無理に乳を搾らむとすれば、その牛、乳を出さぬものなり。人間も性悪しとて無闇に鞭撻を加へて教育すればますますその性をそこなふて悪くするに相違なしと思ふ。云々」

この時の記事は四方太の言ったこと、節の言ったことも並べて書かれており、興味深く感じられた弟子の言葉を文章としたものである。牛乳の搾乳業をしていた左千夫の経験から来る談話が子規には興味深く感じられた。門人達は寝たきりの子規に様々な話をして子規を慰めようと——子規の言葉で言わば「面白」がらせようとしたが、それはそのままこうした「病床六尺」の記述にもつながっていたわけである。

「病床六尺」に長塚節の名が登場するのは三回である。子規には左千夫と節を並べ、比較して考える意識があった。これは俳句の上で、虚子と碧梧桐を並べて考えたのと同じ発想であり、すでに書生時代「七変人表」を作ったり、友人分類のようなことをしていたのにも通じる。第七回に次のようなことが記されている。左千夫が柿本人麻呂は「肥えたる人」であつたらうというのに対し、節は「瘦せたる人」ではあるが「骨格に至ては強くたくましく人ならん」と言った。二人のこの話を聞いて、子規は「思わず失笑」した。左千夫は太った人であり、節はやせているが骨格の発達した人だから、二人とも自分に引き合わせて人麻呂の姿を想像したのだろう、してみると、人間はどこまでも自分を基準として他の人を類推するらしい。そのことに気づいて面白く感じたというのである。これ

は人麻呂に対する関心というより、門弟への関心・興味であり、子規の弟子に対する愛着の現れでもある。この二人の比較の後に「関東の田舎」の名物として醤油や味噌をあげ、下総の名物として成田の不動・佐倉宗五郎・野田の亀甲万をあげているのも、この二人の関東人―左千夫は千葉県、節は茨城出身である―の話素材としたものであろう。

第九十九回の「おくられものくさぐさ」に「やまべやまと芋は節より」とあり次のような長歌が見える。

「しもふさの、ゆふきごほり（||結城郡）の、きぬ川の、やまべのいを（||魚）ははしきやし（||なつかしいなあ、すばらしいなあ）、見てもよきいを、やきてにて、うまらにをせ（||おいしく召しあがって下さい）と、あたらしも（||もつたないことしたものだ）、かれの心を、おくりくる、みちにあざれぬ（||途中で腐ってしまった）、そをやきて、うまらにくひぬ（||おいしく食べた）、うじははへども」、「そらみつ、やまどのいもは、鳶のねの（||鳶の音のその「とろろ」ではないが）、とろろにすなる（||とろろにするという）、つくいもなるらし」これは長塚節がやまべとやまと芋を子規に送ったそのお札を長歌としたものである。

「病床六尺」にはこのような長歌として発表しているが、節宛ての実際の書簡は次の二通だった。

「やまべといふ肴、山の如く有難く候。但し、悉くくさりて蛆湧き候はいかにも残念に候。量は左迄沢山ならずとも、腹をあげて焼いて日に干してといふだけの手数を取ってもらふとよかった。もつともよろしき部分少々とりて、食し試み候にきわめてうまく候。此魚は一般に、はえ又はや（鮠）と申候。苗代菜莫<sup>ぐみ</sup>はほ完全に参り候」（明治三十五年七月三十一日）

「やまと芋有難く存じし候。つまらぬ御菓子すこしさし上げ候。小づつみにて」（同八月十六日）

節はこうした二通の礼状を受け取ると同時に、「日本」新聞を通して長歌、短歌も読んだことであろう。弟子達

は子規を喜ばせようと様々な贈り物をした。その贈り物を子規は素直に喜び、無邪気な歌を作って楽しんだ。病者子規は文学サークルの中心であり、子規に接することによって全国に自らの名を知らしめることにもなった。子規はこうして門弟達を「社会に推挙」（「子規居士と余」）し、自らのサークル活動を余に示したとも言える。第二百二十回に「左千夫いふ」のあとに「節いふ」と続いて、長塚節の言葉として「かづらはふ雑木林を開いて濃き紫の葡萄圃となさむか」と記している。これは長塚節の語った将来の夢を記したものであり、節の将来を期待する気持ちも潜んでいよう。

「病床六尺」に最も数多くその名前が登場しているのは河東碧梧桐で十六回に及んでいる。妻茂枝子と共に看病のためにやってきてドンコ釣の話をしたり、故郷松山に池が多かったという話をしたこと、茂枝子がカナリアの話などをしたことなどが記され（第五回）、美女桜やロベリヤ、松葉菊などを盆栽にしてみらされてきたこと（第二十六回）、亡き兄の硯を子規に貸してくれたこと（第三十二回）、暑さに耐えかねている子規のため、団扇代りに「風板」なるものを作ってくれたこと（第六十八回）などが記されている。いずれも日記的なスタイルで書かれており、碧梧桐の至れり尽くせりの看護ぶりがしのばれる。「病床六尺」はこうして一面において病床日記であり、いかに看護を受けたかの記録でもある。碧梧桐に比べると虚子の名が見えるのは少なく、わずか六度で、共に枕もとの画帖について話しあったこと（第六回）の他はその句評や訪問があったということだけで、この時期の看病ぶりとしては碧梧桐の方が献身的であったことが察せられる。虚子はホトトギスの売れ行きが好調だったことや俳書の出版などで多忙だったということもあろう。子規没後「升（＝子規の幼名）は清（＝虚子）さんが一番好きであった。清さんには一方ならんお世話になった」とその母は虚子に語っている。

この他、常磐会時代の舎監であった内藤鳴海、日本新聞社の社友、寒川鼠骨、鳥取県生まれの俳人坂本四方太な

どの俳人が、看病し、贈り物を届け、俳句を学ぶなどという形で子規を訪れており、子規はこれらの人々との交流を心から楽しみとじていた。それが「病床六尺」を生み出す重要な母胎ともなった。

子規はこうした知人だけでなく、見知らぬ人であっても来客を歓迎した。それは病苦を生きる子規の知恵だった。宗教を信じない自分に宗教は何の役にもたたないと記した後で、子規は「情けある人我病床に来て予に珍しき話など聞かさんとならば、謹んで予はために多少の苦を救はるることを謝するであろう。予に珍しき話とは必ずしも俳句談にあらず、文学談にあらず、宗教・美術・理化・農芸・百般の話は知識なき予にとってことごとく興味を感ぜぬものはない。ただ断って置くのは、差向うて坐りながら何も話のない人である」（第四十回）と談話の相手を求めている。

又、そればかりでなく紙面を借りて具体的に来客をつのっている。「毎週水曜日及び日曜日を我が庵の面会日と定め置く。何人にも話のある人は来訪ありたし。但しこのごろの容態にては朝寝起後は苦しき故、朝早く訪わる事だけは容赦ありたし。：話の種は雅俗を問わず何にても話されたし。學術と実際とにかかわらず、各種専門上の談話など最も聞きたしと思ふ所なり」（第七十七回）——これらの文章から察せられることは、子規がいかに様々な知識、情報を求め、それを楽しんだかということである。それは裏返して言えば、孤独を恐れる気持ちも一つである。孤独を忘れ、死の不安を忘れようとして健康である時よりもかえって人々を、にぎやかさを求めた。多くの人がその子規の願いに応じた。その点に子規の幸せがあり、文学活動がある。「病床六尺」には「ぢやさそうな（〓〓だそうだ）」「〓ぢゃ」「〓さうな」というような伝聞のスタイルを示す表現が多くみられるが、これらの多くは弟子や見舞客によってもたらされた情報であることを示している。その意味では「病床六尺」は子規を中心とする共同体——病者の共同体——が生み出したものと言ってよい。

だが、病氣といつても結核という死につながる伝染病である。訪れる人、又、子規自身に病氣が感染することを恐れる気持ちはなかつたろうか。これについては「消息」と題して「ほととぎす」に載せた文章（明治三十三年一月六日の記述）がある。

「東京の新年は如何にや。病室の外一步を出でざる私には分り申さず。病室の新年は諸君の来訪ありて可なり賑ひ申候」——こんな一文を以て始められる「消息」はその題が示すように、手紙の形をとつて書かれた文章で、そこでは「肺病の患者」と一般の健康な人がどうつきあうべきかということが理路整然と、情理を尽くして述べられている。これは病者子規の多彩な交友を考える場合きわめて重要な一文と思われる。そこで、その要点をまとめて解説をしてみたい。

①自分が肺病の患者であることは周知のことである。肺病は結核菌の感染によつて起こる伝染病であり、患者の喀痰の中にその菌がある。これを防ぐには喀痰の消毒が大切だが、唾液にも菌が入ることがある。そこで医師からは食器、寝具、衣服その他の器具を他の人と別にするように、又来訪者に対しては患者の触れた食物、その家を出された食物を食べるなど「命令」されている。（医学の立場から）

②自分の家では喀痰を石炭酸などで消毒している。食器はもちろん家族と別にし、食器を載せる膳や盆、食器を洗う桶や布片も患者専用とし茶碗や皿はときどき煮沸消毒している。又、食べ残したものは必ず捨てるし、衣類や寝具も家人と別にしている。細かなことを言えば書物や原稿用紙などをめくる時、指頭に唾をつけない、封筒の蟬をなめない、書簡の開封は人に頼む、切手や印紙を貼らない、筆の穂をかまない、客に出した菓子に手を触れない、

などといったことに注意している。(自分の予防策)

③それでも伝染の恐れはある。須磨での痰検査の結果「七」であり、今はおそらく「十」「十五」にもなって相当菌が多くなっているだろう。自分の家はさながら「病毒貯蓄所」である。だから病室には菌が飛散し、口角泡を飛ばす時、無数の病毒が吹き出されるに違いない。従って「あな恐ろし肺患者の家へは近づかぬが宜しく候」(人々に対する威嚇)

④それなら肺患者は「孤島の流人の如く一人ポツチで暮らすべきか」——それについては大疑問がある。なぜなら「共に物を喰いながら快談するの一事なくば病人の楽しみは過半をそがれ申すべく候」からである。病人と言えど人々と交流したいし、それが病人の楽しみでもある。(病人の立場から)

⑤病人を訪れるかどうか、又、訪れた時、どうするかは、結局は訪れる人が決める問題で、菓子や飯を出しはするが何も食べないのは失礼などと遠慮するのは及ばないし、菓子・果物だけは大丈夫と考える人はそれだけ食べるのもよい、又何でも食べたいという人は食べるのがよい。病人である自分から訪れる人に対してどうしろとは決して勧めない。(見舞客の主体性)

⑥同じ病気に苦しむ人に一言するなら、滋養物を食べるように勧めたい。初期のうちはそれで治るし、末期にあっても命長らえることができる。現在のところ肺病の効果的な薬はない。(同病者へ)

以上のことからわかるように医師、病人、見舞いの人、それぞれの立場を踏まえた上できわめて理性的・合理的な思考がここには伺われる。それは単に医学的な立場からどう病気に対処するかということだけでなく、病者と健康な者がいかに交わっていくかを病者の立場から考えたものである。

子規は言う。医学の発達により肺患が結核菌の伝染による病気だとわかった。しかしそのため、たとえば母が結

核であるとするとその子供は母に甘えることができない——伝染病だと認定されたことはかえって「残酷」な結果をもたらしている、と。おそらくこのような喩えの根底には子規自身の孤独感・疎外感がある。それは科学としての医学に対す抗議とも言える。伝染病だとわかったことによつて予防の道も開けはした。しかし、それゆえに、かえつて病者と他の人々との人間関係が絶たれることにもなった。病気の苦しみは、その人間関係を絶たれることの中にあるという訴えは逆に、病者にとつて、人と関わるのがどれ程の楽しみかを示すものであり、人々の来訪を願う子規の切ない思いの表われでもある。

しかし、子規は医学的な知識を無視して人々との交わりを求めようとするのでない。見舞客に病気が移らぬよう細心の注意を払った上で、来訪する人の責任と意志を尊重しようとする。自分は自分で注意しているが、来訪する人も又、自らの判断において予防の方法を考え、その人それぞれの対処法をとつてほしい、自分はそれに対し一切干渉するものではないというのである。人々に対する威嚇も、毒舌的な皮肉のうちに、来訪する人の覚悟——主体性を促すものであつたらう。

威嚇的な言葉はあるにもかかわらず、病者子規の「人気」は衰えなかつた。おそらく「ホトトギス」に掲載されたこの一文は多くの人が読んでいたであらう。来訪する人々は子規に言うように、皆それぞれの覚悟と工夫をもち、その病床に参じ、その文学の共同体にあづかつたのである。その中で子規の病苦に喘ぐ中で文学に情熱を傾ける姿に深い感銘を受けた。又、子規の自分達への「愛」を深く感じたことであらう。同時に、子規自身も又、訪れる人々からの情報を素材として、自らの文学活動を維持し続けた。子規の文学活動を支えたものは、これら病床の子規のもとに馳せ参じた多くの文人達でもあつたのである。



しかしどんなに門弟、知人が子規の趣向につきあい、贈り物を届け、病床に馳せ参じ、あるいは看病したりして子規を支えたといってもそこにはおのずから限界がある。それらの人々は子規と毎日常生活を共にしているわけではなく、しばしばであるにせよ、訪れては帰っていく人々である。病者子規の陰にあって、毎日つききりでその生活を支えた人として母八重と妹の律、特にこの律の存在を忘れることができない。

子規より三才下のこの妹はどういうわけか、二度の結婚にいずれも短期間のうちに失敗し、母と共に松山で暮らしていた。一方、子規が結核に侵されていることを知り、その身を案じた「日本」新聞の社主、陸羯南は子規を採用すると同時に母と妹をその看病のためにもと考えて、故郷松山から招くことを提案した。子規もそれに同意し明治二十五年十一月二人を迎え、以後親子三人の借家暮らしが始まる。二十九年以後完全に臥褥の身となった子規を支えたのはこの二人だった。二十二才の若さで東京に出た律はおそらく結婚しようと考えれば、できないわけではなかったろう。又、仕事を外に求めることもできたであろう。事実、子規没後、律は共立女子職業学校に入学し、卒業後、同校の事務職員となり、やがて同校の教員となった。子規死後も子規庵を守り続けたこの女性には、兄の文学者としての活動を誇り、そのために己を捧げようとする信念のようなものが感じられる。もちろん若くして兄を頼って東京に出た時、自分の将来についての夢もあったであろう。しかし、子規の病気はこの妹を拘束した。妻をもたない病弱な兄、しかもその兄はしだいに全国に名を知られるようになり、多くの人が兄を尊敬して訪れてくる—そのような兄を置いて家を出るなどということは考えられなくなっていった。そういう自然な成り行きはある。しかしそれは自然な成り行きというにはあまりに辛く、苦しいことであったはずだ。脊椎カリエスのもたらす

痛み、苦しみに号泣し、癩癩を起こす兄をほとほとあまし、涙したことも多かつたろう。訪れる人も多かつたから、その来客の接待も難儀であつたろう。わがままで贅沢な子規の食事の世話も大変だつたろうし、兄の乏しい給料の中から医療費、食費、家賃などを払わねばならず、家計のやりくりにも苦しんだらう。しかし、それに耐えぬき、子規の人生を最期までいかにも子規らしく生きることがをまっとうさせた。子規の人生は律によって支えられていたのであり、子規の文学も律なかりせば、あれ程豊かな実りをみながったはずである。子規を語る時、ほとんどが俳句や短歌における門人達、後継者達ばかりが語られているが、実はこの律の存在が陰の力となつていたことを見落とすわけにはいかなのである。

「松蘿玉液」「墨汁一滴」そして「病床六尺」に至るまで、子規の公に向けて発表された作品の中にはほとんどこの律の存在が語られていない。しかし「情をためず何もかもしるし」と自ら語る私的な日記―「仰臥漫録」をみると病者の手足となつて献身する律について信じられぬ程の罵倒の言葉をなげつけている。

「律ハ理屈ツメノ女也 同感同情ノ無キ木石ノ如キ女也 義務的ニ病人ヲ介抱スルコトハスレトモ同情的ニ病人ヲ慰ムルコトナシ 病人ノ命ズルコトハ何ニテモスレトモ婉曲ニ諷シタルコトナドハ少シモ分ラズ 例ヘバ『団子ガ食ヒタイナ』ト病人ハ連呼スレトモ彼ハソレヲ聞キナガラ何トモ感ゼヌ也 病人ガ食ヒタイトイヘバ若シ同情ノアル者ナラバ直ニ買フテ来テ食ハシムベシ 律ニ限ツテソナコトハ曾テ無シ 故ニ若シ食ヒタイト思フトキハ『団子買フテ来イ』ト直接ニ命令セザルベカラズ 直接ニ命令スレバ彼ハ決シテコノ命令ニ違背スルコトナカルベシ ソノ理屈ツポイコト言語道断ナリ 彼ノ同情ナキハ誰ニ対シテモ同ジコトナレトモ只カナリヤニ対シテノミハ真ノ同情アルガ如シ 彼ハカナリヤノ籠ノ前ニナラバ一時間テモ二時間ニテモ只何モセズニ眺メテ居ル也 併シ病人ノ側ニハ少シニテモ永ク留マルヲ厭フ也 時々同情トイフコトヲ説イテ聞カスレトモ同情ノ無イ者ニ同情ノ分ル筈モ

ナケレバ何ノ役ニモ立タズ 不愉快ナレトモアキラメルヨリ外ニ致方モナキコト也」

子規はここで肉親——しかも客観的、公平にみて自分の一番の恩人であるはずの肉親に対して手厳しい批判を浴びせている。原因は自分に対する介護に愛情がこもっていない、気がきかない、という点にある。しかしこれは、律を公平にみたものというより、自分の思い通りの看病をしてくれないことからくる腹立ちまぎれの記述といつてよい。ここには肉親——ことに妹に対してならではの甘えやわがままがある。誰にしる、100%満足のいく介護というものはありえないだろうし、介護の仕方そのものよりも、自分のどうにもならない病状からくるふさいだ思い、うっ積するストレスが遠慮会釈のない形で爆発したものとみるべきであろう。

だがそれにしても、子規はさらに激しい言葉を律に向かって投げつけている。

「彼ハ癩癩持ナリ 強情ナリ 氣ガ利カヌナリ 人ニ物問フコトガ嫌ヒナリ 指サキノ仕事ハ極メテ不器用ナリ 一度キマツタ事ヲ改良スルコトガ出来ヌナリ 彼ノ欠点ハ枚挙ニ遑アラズ 余ハ時トシテ彼ヲ殺サント思フ程ニ腹立ツコトアリ サレドソノ実彼ガ精神的不具者デアルダケ一層彼ヲ可愛ク思フ情ニ堪ヘズ 他日若シ彼ガ独リデ世ニ立タネバナラヌトキニ彼ノ欠点ガ如何ニ彼ヲ苦ムルカラ思フタメニ余ハ成ルベク彼ノ癩癩性ヲ改メサセント常ニ心ガケツツアリ 彼ハ余ヲ失ヒシトキニ果シテ余ノ訓戒ヲ思ヒ出スヤ否ヤ

病勢ハゲシク苦痛ツノルニ従ヒ我思フ通りニナラヌタメ絶エズ癩癩ヲ起シ人ヲ叱ス 家人恐レテ近ヅカズ 一人トシテ看病ノ真意ヲ解スル者ナシ

陸奥福堂 高橋自恃ノ如キモ病勢ツノリテ後ハ屢しばしば妻君ヲ叱リツケタリト」

妹を「癩癩持」「強情」などと言っているが、それはそのまま病床の子規にあてはまるものだろう。むしろ病床の子規のわがままが反応して律の反感を買い、二人が対立してどうしようもなくなる。そんなゆきまだった二人の

様がしのばれてくる。おそらくこの一文を書いたのは律と争った後であろう。子規はここで「殺サント思うフ程ニ」腹を立てる一方、「精神的不具者」（ひどい言葉である）だと思つて「可愛ク」てならないという。こうした律に對する怒り、罵倒の裏にはエゴイステイックな肉親愛がある。子規は自分の気持ちを完全に分かつてくれる人、いたわつてくれる人を求めていた。身の回りの世話から精神的な援助まで——完全な介護、それが求められるのは肉親だけである。それを求めるのは甘えであるが、その甘えが充たされない時、逆に腹を立てる。これはそのような種類の怒りであり、すべては子規の病苦に発するものである。病苦は孤独なものである。誰もその苦しみをわかってくれない。そんな時、自分と同じように病苦にさいなまれて腹を立てた高橋自恃を思い出してあきらめるしかなかった。口で叱りとばしただけでは足りず、腹いせとして書き記された日記はいつしか深いあきらめへと変わつていく。

介護の不満をどんなに書きつらねてみても、子規は律なしでは自分の生活が成り立たないことは百も承知だった。承知していながらもなおかつ律を見る目は冷やかである。

「律は強情也 人間ニ向ツテ冷淡也 特ニ男ニ向ツテ甚也 彼ハ到底配偶者トシテ世ニ立ツ能ハザルナリ シカモノノ事ガ原因トナリテ彼ハ終ニ兄ノ看病人トナリ了レリ 若シ余ガ病後彼ナカリセバ余ハ今頃如何ニシテアルベキカ 看護婦ヲ長ク雇フガ如キハ我能ク為ス所ニ非ズ ヨシ雇ヒ得タリトモ律ニ勝ル所ノ看護婦即チ律ガ為スダケノ事ヲ為シ得ル看護婦アルベキニ非ズ 律ハ看護婦デアルト同時ニオ三ドンナリ オ三ドンデアルト同時ニ一家ノ整理役ナリ 一家ノ整理役デアルト同時ニ余ノ秘書ナリ 書籍ノ出納原稿ノ浄書モ不完全ナガラ為シ居ルナリ 而シテ彼ハ看護婦ガ請求スルダケノ看護料ノ十分ノ一ダモ費サザル也 野菜ニテモ香ノ物ニテモ何ニテモ一品アラバ彼ノ食事ハ了ル也 肉ヤ肴ヲ買フテ自己ノ食料トナサンナドトハ夢ニモ思ハザルガ如シ 若シ一日ニテモ彼ナク

バ一家ノ車ハソノ運転ヲトメルト同時ニ余ハ殆ド生キテ居ラレザル也 故ニ余ハ自分ノ病氣ガ如何ヤウニ募ルトモ厭ハズ 只彼ニ病無キコトヲ祈レリ 彼在リ余ノ病ハ如何トモスベシ若シ彼病マンカ彼モ余モ一家モニツテモサツテモ行カヌコトトナル也 故ニ余ハ常ニ彼ニ病アランヨリハ余ニ死アランコトヲ望メリ 彼ガ再ビ嫁シテ再ビ戻リソノ配偶者トシテ世ニ立ツコト能ハザルヲ証明セシハ暗ニ兄ノ看病人トナルベキ運命ヲ持チシ為ニヤアラン禍福錯綜人智ノ予知スベキニアラズ」

律が二度まで離婚した原因をその「強情」で「冷淡」な性格にありと、それこそ「冷淡」に言い放ち、自分を看病してくれることに対しても「暗ニ兄ノ看病人トナルベキ運命ヲ持チシ為ニヤアラン 禍福錯綜人智ノ予知スベキニアラズ」などと他人ごとのように平然と記している。あまりにむごい非情な言い方と言うべきであろう。これを例えば宮沢賢治の妹に対する思いなどと比較してみれば、その違いに驚くばかりである。これを病気のなせるわざとし、封建的な家長制度のせいとして子規をかばうことができるのだろうか。

人間としての子規には一方で門弟達との温かい交流を求め、門弟達を手放そうとしない「執着—愛」があった反面、こうした家族に対する思いやりのなさ、非情さがあつたと思われる。粟津則雄は子規門の俳人若尾瀾水が雑誌「木兎」に「子規子の死」と題して寄せた文章を次のように紹介している。(粟津則雄「正岡子規」による)

「先生が枕をそばだてて、時々きれ長き三白眼を以て客の面上を顧眄しつゝ、最も満足げに説き出し来る話頭は、多くは厭ふべき人身攻撃、若しくは他人の失策話、又は嘲笑すべき愚人の行為なりき。先生は物に同情せんよりは、寧ろ冷評するに於て愉快を感じたるが如し」そして「このように他人に対しては『冷血』であつた子規が自分自身に対してはおそろしくエゴイスチックに『同情』を強要し、たとえば日夜看護に明け暮れていた母や妹に対して『尚ほ思ひやりなしとて苦々しく叱罵』したことを(瀾水は)非難する」

粟津則雄はこの瀾水の子規批判を受けて、子規の中には「何か底知れぬ魔的なもの」が潜んでいたと遠まわしな言い方をするにとどめているが、「冷血」という瀾水の指摘は子規の一面―欠点を鋭くついているのではなからうか。瀾水はさらに「先生の狭量、嫉妬、我執は其冷血の変体とも見るべきか。先生は党同伐異の念甚だ強し。自己の門弟以外のものは容易に其美所を賛揚せず。若し社会が或る人の成功を嘆賞する時は先生に取っては苦悶なり。負痛なり、故に悍然として立ち自己の心意に鎮痛剤を投ぜざるなし、即ち強て敵手の暗処欠点を描いて攻撃するなり」と記しているが、これも子規の欠点を鋭くつく言葉だと思われる。ここで思いあわせられるのは子規が自らの雅号に「冷笑居士」といい、かつて「漱石」という号をつけたのは「高慢なるよりつけたるものか」と記していることである。子規の一面には誇り高く己れを持し、人を痛烈に批判する傲慢さ―他者に対する思いやりのなさ、冷たさがあつたと思う。それは、むろん誰に対してもということでなく、相手によっては全く温かい、この上ない友であり指導者でもあつた。

子規についての言説で今流布しているのはそのほとんどが子規の後継者を自負する人達の子規賛嘆の声である。碧梧桐のように、かなり子規に寄りそっているものから、虚子のように、子規という人間をややつき離してみている（虚子は子規のこの冷たさを恐ろしく感ずることもあつた）ものまで、そのニュアンスに差はあれ、子規という大動脈に包まれている。子規を賞揚することはそのまま自己の地位を固めることにもなつた。子規はすでに偶像になつていた。そのような中であつて、ホトトギス―子規という大源泉、その大静脈からはずれた若尾潤水という知る人も少ない俳人の子規評は実感をもつて迫ってくるのである。

子規の「冷血」―家族に対し、文学上の他派に対して。文学上の派閥の問題については後日考えてみることにし、て家族に対する「冷血」―これは子規の家人に対する叱責を耳にした人が時に感じたことであろうし、「仰臥漫録」

のこれまで引いた叙述からも伺われるところである。一時の感情として律に腹を立てることはあったにしても、なぜ一言の感謝の言葉もないのか。妹の離婚を「兄ノ看病人トナルベキ運命ヲ持チシ為ニヤアラン」などと平然とうそぶく子規は同情の念を欠いた冷たいエゴイストであり、尊大で傲慢な人間である。子規という人は、楽天的な向日性と強い意志、ねばり、闘志をもったすぐれた人物だと思うが、一面においてこのような利己的な面ももっていたといつてさしつかえないと思う。そのような利己心は人間として誰でもある程度もっているものでもあろうが、子規を育てた教育―儒教教育や明治初期の日本人の意識の現われでもある。

「仰臥漫録」の中に記された手厳しい律批判―病床に置かれたこの日記を律が見ようと思えば簡単に見ることができたろう。想像にすぎないが時に口述筆記を引き受けていた律はこれを見た可能性は充分あると思う。見ていながら、しかもそれがやがては多くの人の目にさらされることを予感しても律は兄の書いたものとして、それをそのままにしておいたのではないかと思う。親類の多くは律に対する酷評を知っており、「律さんかわいそうやね」という話もかわされたという。「仰臥漫録」という私的な日記は親類だけでなく門弟達にとってかけがえのない日記となつて、その複製本さえ律の存命中に出版されている。律は自らを守ろうとしそれに反対しようと思えばできたはずである。しかしそうしなかった。そこに律という女性の芯の強さを感じる。律はおそらく兄がどんなに自分を悪く書こうと、平気だった。罵倒の言葉なら兄からしばしば浴びせられた。それが書かれたからと言って、又、他人が見たからといって少しもゆるがなかった。兄の親切、感謝など期待して看病したわけではない。自分に棄てられたら全く無力な兄であることを律はよくわかつていた。強そうに威張っている兄は実は一人では立ち上がることもできない病者―弱者なのである。敗け犬の遠吠えのように、どんなに自分をどなり、叱責し、悪口を書きつけようと律は黙って兄につかえていた…。幼少年時代に、意気地なしでよく友人にいじめられて帰ってきた子規にかわ

って気丈夫なこの律が石を投げて敵打をした、ということが母の回想にある。一言の弁解もせず、黙々と奉仕する律の姿は社会の表に立って活躍する兄の陰にあって支える強い肉親愛が感じられる。兄と妹という切っても切れない血肉の関係、それは夫婦という「他人」の結びつき以上に強いものとしてここにあるのではなからうか。

「仰臥漫録」に痛烈な律への怒りを記した子規は「病床六尺」にそれを和らげ、エッセイ風の形で看護論を展開した。それが第六十五回から六十七回までの文章で看護論から女子教育論へと発展している。まず第六十五回で子規は重病人にとって死生の問題より、看護の問題が大切だという。

「死生の問題は大問題ではあるが、それは極単純な事であるので、一旦あきらめて仕舞へば直に解決されて仕舞ふ。それよりも直接に病人の苦楽に関係する問題は家庭の問題である、介抱の問題である。病気が苦しくなった時、又は衰弱の爲めに心細くなった時などは、看護の如何が病人の苦楽に大関係を及ぼすのである。殊に唯だ物淋しく心細きやうの時には、傍の者が上手に看護して呉れさへすれば、即ち病人の氣を迎へて巧みに慰めて呉れさへすれば、病苦などは殆ど忘れて仕舞ふのである。然るにその看護の任に当る者、即ち家族の女共が看護が下手であるといふと、病人は腹を立てたり、癩癩を起したり、大声で怒鳴りつけたりせねばならぬやうになるので、普通の病苦の上に、更に余計な苦痛を添へるわけになる。」

こう述べた後で自分の家では「下婢」も「看護婦」も雇っていないから当然「家族の者」(「母」や「妹」と言つてはいない)が食事から洗濯、裁縫、掃除までし、また看病にもあたらなくてはならない。そのため病人がいつも側にいてほしいと言っても「女共」は家事があつてできない、というので争いになる。又、看病の時、病人に対していろいろな工夫をして慰めてくれればいいのに、「女共」にそれだけの工夫がない。それが又、問題で家族の者は「お三どん(＝台所働きの女中)」は得意だが「無教育」のため話すべき材料もなく、振り仮名のない新聞は読め



ないし、振り仮名をたよりに読ませてもすぐ読みあきる、ということ、病人を上手に慰めることのできない「ほとんど物の役に立たぬ女どもである」と決めつけている。そこから結論として「ここに於て始めて感じた。教育は女子に必要である」と断ずるのである。

ここには女性に対する抜きがたい差別があり、言葉のはしはしにそれが伺われる。現代の新聞に発表したら数多くの非難があげせられることだろう。誠に勝手な論理であり、女子に教育が必要だというその根拠も、女性の権利とか男女平等などということからではなく、病者である自分の話し相手になり上手に慰めてくれるために、ということなのである。

続いて第六十六回は、女子教育の内容として「高等小学校教育」はもちろん、できるなら「高等女学校位の程度」の教育が必要で「常識を養う」ために「普通教育」が大切だという。ここでも病人のための女子教育が説かれる。子規は言う。「たとへば病人が何々を食ひたいといふ。而も至急に食ひたいといふ。けれども人手が少なくて、別に台所を働く者が無い時には病人の傍で看病しながら食物を調理するといふ必要も起つて来る。かやうな事は格別むづかしい事でも無い様であるが実際これだけの事を遣つてのける女は存外少ないかと思はれる。それはどういふわけであるかといへば、それを遣るだけの知識さへ欠乏して居る、即ち常識が欠乏して居るのである。」

子規はここで「常識」という言葉を食事の準備をするなどの家事に対応させて使っている。女子も一般的な知識・教養を身につけて病人を慰め、その話し相手になってほしいそのために教育が必要だというのである。子規のこのような記述の裏には、家族が自分の話し相手になつてくれない、面白い話をしてくれない、教養がないという不満がある。これ又、きわめて勝手な男中心、病人中心の一方的な議論であり、女子教育論としては無茶な意見とさえ言えよう。しかし、考えてみれば、子規は女性に「お三どん」の役ではなく共に語りあえる友人を求めたとも言

える。それは女性が単に家事だけで事足りりという時代にあつて、精神的な交流のできる存在であつてほしいという主張とみることもできる。それは現代でも通ずる考えでもあろう。

女子教育の問題は第六十七回でさらに、学校教育より家庭における教育の問題として重要だという論に發展していく。家庭教育といへば一般に「しつけ」と考える向きもあるが、子規が家庭における機能として最も重視しているのは「一家の団欒」ということである。大岡信も言うように〔正岡子規―五つの入口〕この指摘は子規の家庭教育論、女性教育論として非常にすぐれたものと思われるので次に全文を引いてみる。

「家庭教育といふ事は、男子にも固<sup>もと</sup>より必要であるが、女子には殊<sup>こと</sup>に必要である。家庭教育は知らず知らずの間に施されるもので、必ずしも親が教へやうと思はない事でも、子供は能く親の真似をして居る事が多い。そこで家庭教育はその子供の品性を養ふて行くのに必要であるが、又学校で教へ無いやうな形式的の教育も、極<sup>ごく</sup>些細な部分は家庭で教へられるのである。例をいへば子供が他人に対して、辞儀をするといふ事を初めとして、来客にはどういふ風に応接すべきものであるかといふ事などは、親が教へてやらなくてはならぬ。殊に女子にとっては最も大切なる一家の家庭を司つて、その上に一家の和樂を失はぬやうにして行く事は、多くは母親の教育如何によりて善くも悪くもなるのである。処が今迄の日本の習慣では、一家の和樂といふ事が甚だ乏しい。それは第一に一家の団欒といふ事の欠乏して居るのを見てわかる。一家の団欒といふ事は、普通に食事の時を利用してやるのが簡便な法であるが、それさへも行はれて居らぬ家庭が少くは無い。先づ食事に一家の者が一所に集る。食事をしながら雑談もする。食事を終へる。又雑談をする。これだけの事が出来れば家庭は何時迄も平和に、何処迄も愉快であるのである。これを従来の習慣に依つてせぬといふと、その内の者、殊に女の子などは一家団欒して楽しむべきものであるといふことを知らずに居る。そこで他家へ嫁入して後も、家庭の団欒などいふ事をする事を知ら無いで、殺

風景な生活をして居る者がある。甚しいのは男の方で一家の団欒といふ事を、無理に遣らせて見ても、一向に何等の興味を感じぬのさへある。斯やうな事では一家の妻たる者の職分を尽くしたとはいはれ無い。それ故に家庭教育の第一歩として、先づ一家団欒して平和を楽しむといふ事位から教へて行くのがよからう。一家団欒といふ事は唯に一家の者が、平和を楽しむといふ効能がある許りで無く、家庭の教育も亦この際に多く施されるのである。一家が平和であれば、子供の性質も自ら平和になる。父や母や兄や姉やなどの雑談が、有益なものであれば子供はそれを聴いてよき感化を受けるであらう。既に雑談といふ上は、むづかしい道德上の議論などをするのでは無いが、高尚な品性を備へた人の談ならば、無駄話のうちにも必ずその高尚な処を現して居るので、これを聴いて居る子供は、自ら高尚な風邪に感化される。この感化は別に教へるのでも無く、又教へられるとも思はないのであるが、その深く浸み込む事は学校の教育よりも、更に甚しい。故に家庭教育の価値は或場合に於て学校の教育よりも重いといふても過言ではない。」

第六十五回、六十六回の、病人の看護に中心をおいた自分勝手な女子教育論は、ここに至つて己れを離れた公平な、すぐれた家庭教育論になつており、同時に日本の家庭のあり方への批評となつてゐる。

子規はこのよゝうな発想をどこから得たのか―子規の幼少年期にここにいゝよゝうな特に温かい「団欒」があつたとは思われない。「日本の習慣では、一家の和樂といふ事が甚だ乏しい」といゝ方が子規自身の幼少の家庭生活の實態に近かつたのではないか。「食事をしながらも雑談する。食事を終へる。又雑談する。これだけの事が出来れば家庭は何時迄も平和に、何処迄も愉快であるのである」といゝ記述には、過去の幼少時代の回顧でなく、今現在の体験からくる深い満足感があるよゝうに感ぜられる。妹に当りちらし、罵倒を浴びせた子規はいつもこの妹にそのよゝうな感情を抱いていたわけではない。自己的で冷たい、尊大な一面はあつたにせよ、同時に温かい家庭的なぬくも

りを子規は求め、大切にもしていた。事実、母子三人、家庭と呼ぶにはあまりにも辛いことの多い、ささやかな、わびしい暮らしではあっても満ち足りた平和な時もあった。「仰臥漫録」に記された次のような一節には母や妹に寄せる温かい思いがあり、幸せを感じている子規がいる。

「母モ妹モ我枕元ニテ裁縫ナドス。三人ニテ松山ノ話、殊ニ長町ノ店家ノ沿革話イト面白カリキ」(九月二日)――親子三人の共通の話題と言えば故郷松山の話であった。病床の子規を囲んで母と妹が裁縫しながら語りあっている。食事時ではないがこれも楽しい団欒の一時であった。さらに又「午後家庭団欒会ヲ開ク。隣家ヨリモラヒシオハギヲ食フ」(九月二十六日)というさり気ない記述もある。隣家からもらったおはぎを家族三人で食べながら語りあう。ここに「家庭団欒会」という言葉がはつきり使われている。これは「病床六尺」に連なるものである。

しかし親子三人の話だけではどうしても種も尽きる。子規は家族団欒の代りに門弟達をよく招いては食事を共にし談笑を楽しんだ。「仰臥漫録」には食事の記録が多くスペースをさいて記されているが、家族団欒ならぬ「師弟団欒」の楽しい一時の回想が記されている。

「去年ノ誕生日ニハ御馳走ノ食ヒヲサメヲヤル積リデ碧<sup>へき</sup>四<sup>し</sup>虚<sup>きょ</sup>鼠<sup>そ</sup>(＝碧梧桐、坂本四方太、虚子、寒川鼠骨、いづれも俳人)四人ヲ招イタ。コノ時ハ余ハイフニイハレヌ感慨ニ打タレテ胸ノ中ハ実ニヤスマルコトガナカツタ。余ハコノ日ヲ非常ニ自分ニ取ツテ大切ナ日ト思フタノデ先ツ庭ノ松ノ木カラ松ノ木へ白木綿<sup>もめん</sup>ヲ張りナドシタ。コレハ前ノ小菊ノ色ヲウシロ側ノ鶏頭ノ色ガ圧スルカラコノ白幕デ鶏頭ヲ隠シタノデアアル。トコロガ暫クスルト曇リガ少シ取レテ日ガ赫<sup>かく</sup>トサシタノデ右ノ白幕へ五、六本ノ鶏頭ノ影ガ高低ニ映ツタノハ実ニ妙デアツタ。

待チカネタ四人ハヤウヤウ夕刻ニ揃フテソレカラ飯トナツタ。余ハ皆ニ案内状ヲ出ストキニ土産物ノ注文ヲシテオイタ。ソレハ虚子ニ『赤』トイフ題ヲ与ヘテ食物カ玩具ヲ持ツテ来イトイフノデアツタガ、虚子ハユデ卵ノ真つ

赤ニ染メタノヲ持ツテ来タ。コレハニコライ会堂デヤルコトサウナ。鼠骨ハ『青』ノ題デ青蜜柑、四方太ハ『黄』ノ題デ蜜柑ト何ヤラト張子ノ虎トヲ持ツテ来タ。碧梧桐ハ茶色、余ハ白デアツタガ何ヤラ忘レタ。食後次第二話ガハズンデ来テ、余ハ昼ノ間ノ不安心不愉快ヲ忘レル程ニナツタ。余ハ象ノ逆立ヤジラフノ逆立ノポンチ絵ヲ皆二見セウト思フテ頻リニ雑誌ヲアケテ居ルト四方太ハ張子ノ虎ノ髯ヲヒネリ上ゲナガラ『独逸皇帝ダ独逸皇帝ダ』ナドト言フテ居ル。実ニ愉快デタマラナンダ。(十月二十七日)

明治三十三年九月十七日、三人の俳人を集めて子規の誕生会が開かれた。趣向をこらした楽しい食事会がまざまざと思ひ出され、生きていることの「愉快」を満喫している子規の姿がしのばれる。わがままな子規は寂しがり屋の孤独な子規だった。それゆえにこうして家族との団欒、門弟との団欒を求め、人々と共に会食し雑談をかわしあう一時をこの上もなく大切なものとした。そうした日常茶飯の人々との交流が病者子規の限らない愉悦となった。子規は病むことによつて、ささやかな日常の意義を身をもつて発見していった、ともいえよう。そこでかわされることも、たわいもない「無駄話」であり、些事であつたらう。しかし、こうして共に楽しい一時を共有する中で、門弟達は互いに啓発され、「自ら高尚な風に感化」されていった。師である子規の人格的、人間的な感化が大きかった。病者を中心とする共同体のぬくもりはこうして次代の文学活動を準備していったのである。あたかも温かい団欒のある家庭から子供達が育つていったように。

参考文献

- 「碧巖録」岩波文庫
- 「無門関」安谷白雲 春秋社
- 「禪語百選」松原泰道 祥伝社
- 「子規居士と余」高浜虚子 明治文学全集 筑摩書房
- 「竹の里人」伊藤左千夫 明治文学全集 筑摩書房
- 「正岡子規」粟津則雄 講談社
- 「正岡子規」大岡信 岩波書店